

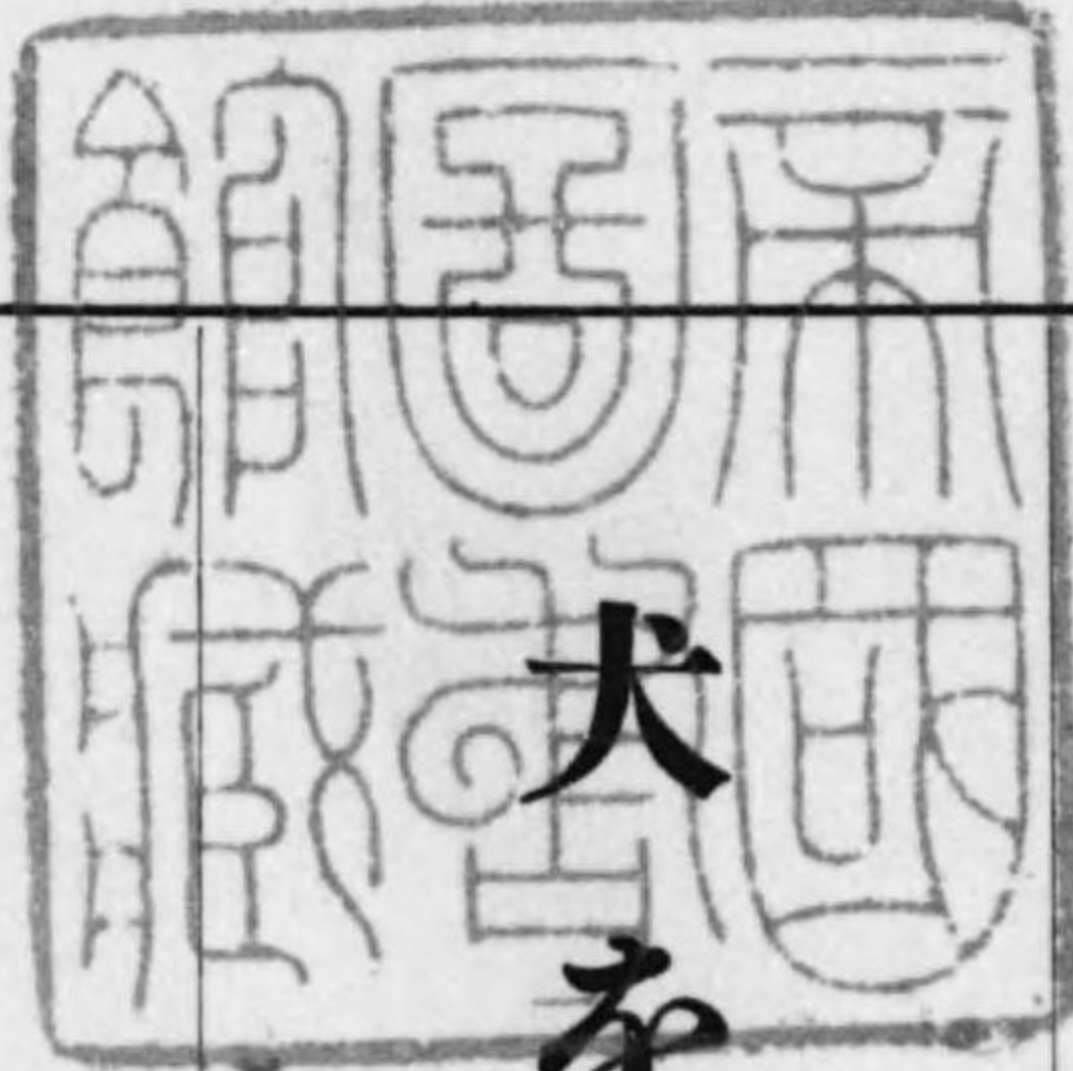
354
905



始



特 232
229



今田莊一著

犬を飼ふ秘訣

哮天舍





— 氏—ナ—夕醫大國英・故—

に法理管育飼の犬てしと長々會員委ブラク・ルネケ
いたげ捧を意敬に、こ・たしを獻貢の的期畫てい就



— 古き日の思ひ出 —

は等彼！仔の狼の生野たれ生てけ受を傳遺の食肉然全
たれ呉てし供提を料材の々色てし關に法育飼の犬の代現
者著端左てつ向

自序

本年一月以來帝國軍用犬協會々誌に連載せられた拙稿——犬の給餌法を茲に別冊として發行せらるることとなつた。筆者の光榮何物も之に過ぎない。

發行に方つて既稿を再校し更に修正を加へて見た。しかし、元來既稿なるものは問答の形式を採つたので、事柄によつては書き足りない點が少くない。そこで、この不足を補ふ爲に更に一篇を草して附け加へることとした。即ち既稿を「問答篇」と唱へ、新たに加へたものを「補足編」と名づけこれを一冊に編綴し「犬を飼ふ秘訣」と題することとした。本書が即ちそれである。

兩編とも極めて粗雑なものではあるが、多少なりとも初心の方々の爲に参考となるものあれば著者の欣幸の上はなし。

昭和十年孟夏

今田 莊一 識

目次

問答編

緒言	(一)
第一章 動物の食物	(二)
(一) 定 義	(二)
(二) 食物の栄養分	(四)
第二章 犬の血種と食物	(七)
第三章 犬の食物の材料	(九)
(一) 通 説	(九)
(二) 動物質の食物	(二)
(三) 植物質の食物	(三)
(四) 水	(六)

第四章 食料に關する雜件……………(三)

(一) 食物の固さと容量……………(三)

(二) 食物と消化力……………(四)

第五章 食物の選擇……………(五)

(一) 配合と變化……………(三六)

(二) 犬の個性……………(四一)

第六章 食物の調へ方……………(四三)

(一) 料理法……………(四三)

(二) 嗜好品……………(四六)

第七章 食事の回数……………(四八)

(一) 回数と時間……………(四八)

(二) 食事の時刻と量の規正……………(五三)

第八章 食物の量……………(五三)

(一) 質と量……………(五三)

(二) 飼ひ過ぎ……………(五七)

(三) 飼ひ不足……………(五八)

第九章 種牝の飼ひ方……………(六一)

(一) 平素……………(六一)

(二) 受胎後……………(六三)

(三) 分娩前……………(六六)

(四) 分娩時とその直後……………(六七)

(五) 授乳……………(七〇)

第十章 仔犬の飼ひ方……………(七五)

(一) 通説……………(七五)

(二) 寒氣の感及と豫防……………(八三)

(三) 哺乳……………(八四)

(四) 離乳と離乳後の食物……………(九三)

第十一章 種牡犬の飼ひ方……………(一〇三)

第十二章 食物と健康 (一〇四)

第十三章 病犬に對する給餌 (一〇八)

結 言 (一一三)

補 足 編

(一) 手段方法の選擇 (一一五)

(二) 犬の個性と食餌 (一二六)

(一) 神経系の榮養に及ぼす感作 (一二六)

(ろ) 内分泌腺と肥瘦の關係 (一二八)

(三) 運動の量と食餌 (一二九)

(四) その他の環境と食餌 (一三三)

(い) 氣候と食物との關係 (一三四)

(ろ) 犬舎と食物との關係 (一三五)

(は) 燠房裝置 (一三六)

(に) 飲水設備 (一三八)

(五) 食物の分量 (一三九)

(六) 食物の品質 (一三一)

(い) 犬の齒と食品 (一三一)

(ろ) 犬の胃腸と食品 (一三一)

(は) 犬と綠草 (一三三)

(に) 肉食と持久力の關係 (一三四)

(ほ) ヴイタミンとホルモン (一三四)

(へ) 食物の品質と體の組織 (一三七)

(と) 食物の品質と肥瘦 (一三八)

(ち) 飼料と骨軟症 (一三九)

(七) 齒の衛生 (一四二)

(八) 大醫パヴロフの實驗を横から見て (一四四)

(九) 成長の旺盛期 (一四七)

目次

六

(十) 人工假母器……………(一四九)

(十一) 病犬の給餌要領……………(一五〇)

(い) 最後の食品……………(一五二)

(ろ) 流動食の與へ方……………(一五三)

(目次終)

犬を飼ふ秘訣



我國に於て比較的立派な犬が出来ないのは、蕃殖法か給餌法かのいづれにか缺陷があることに多く歸するであらう。

蕃殖法に就いては別著「優秀犬作出の理論と實際」に於て愚見の程を述べて置いた。

後に残されたる一半即ち給餌法に就いて、茲に研究の結果を披瀝し、以て全問題を完結したいと思ふ。

實に本篇はこの見地の下に、犬の飼料とこれが給與法に關して、世界的先覺露國イワン・ペトロ

緒言

ウチ・パヴロフの發見に依る犬の生理觀を基とし、英國の最大權威ドクトル・J・シドニー・クーナ
1、R・E・ニコラス氏、A・J・シウエル氏、ドクトル・H・ベリー・ナイト等の所論を大緯とし、乏し
きながら筆者の經驗を小經として書き上げたものである。而も可成判り易きやうに問答式に記述す
ることにした。もしこの小篇が我國の軍用犬改良進歩の爲めに若干なりとも資する所ありとせば、
筆者の欣幸之に過ぎない。

第一章 動物の食物

一定義

〔問1〕 食物とは何か。

〔答〕 (一) 身體を作り上げ且つ之を修繕する爲め、(二) 體温を保ち且つ仕事に要する力を供給す
る爲めより攝る物質をいふ……元來動物の身體は食物なくしては生存すら出来ないものである。ま
してその成長に於ておや。詳しくいへば、動物の身體は父母兩親から受けた生殖細胞が元をなすも

のではあるが、それは食物に依つて發育する一の機力とでも考ふべきもので、この元だけでは發育
はおろか生存すら出来ない。而して發育の爲には建築材料を要し、生存の爲には修繕材料を要す。
しかのみならず、動物は多少にかゝらず活動をなすものである。この活動とは身體の各部を動か
すことは勿論、色々の事を考へたり、色々の事を感じたりすることも動物の身體に對しては一の仕
事であるのだ。この仕事の爲めの消費に對しても物質を補給しなければならぬ。更に動物は仕事を
爲すと爲さざるとにかゝらず、一定の體温を保たねばならぬ。體温は食物の中に含まれてゐる物
質の燃焼に因るものである。これを要するに、食物とは建築修繕の爲めの材料と消費の爲めの燃料
とでも考ふべきものである。

〔問2〕 食物の過不足は動物の身體に如何なる關係を及ぼすか。

〔答〕 過剰あるときは體内に貯へ、不足なるときは體内の貯蓄より支出す……食物が過剰なると
きは、その當座不要なる成分は體内に貯へられ、他日の用に供へらるゝものである。従つて動物は
自然肥えるであらう。この肥え方は或程度迄は動物の健康に差支へなく、否、必要のものであるが、
その度を超すときは却て害をなすものである。又不足なるときは動物はだん／＼瘠せ、終には衰弱

するものであることはいふまでもない。

〔問3〕 動物が肥えるのと痩せるのとは唯食物の過不足に關係するだけか。

〔答〕 否、動物それ々の個性によつても異なる……勿論仕事の量にも關係するものであるが、これ等が全部同等であるとしても體の組織並に神経系の状態によつて可なりの差異を來すであらう。即ち肥え型と瘠せ型の犬といふのはこの個性に關係するものをいふのである。

二 食物の營養分

〔問4〕 主なる營養分の區分は。

〔答〕 (甲)建築、修繕材料 (乙)熱と力との爲めの燃料……(甲)は窒化物(蛋白質)と少量の礦物質は(乙)主として炭化物(含水炭素と脂肪)である。

〔問5〕 窒化物の效能は。

〔答〕 筋肉、骨、靱帶、腦、神經、皮膚、被毛その他運動機關と流動物とを作る……窒化物なくしては寸分の成長も出來なければ、構成上の修繕も出來ない。

〔問6〕 窒化物はどんな食物中に含まれてゐるか。

〔答〕 動物質食物、殊に赤身の牛肉に最も多い……しかしながら、雜穀の如き植物質食物の中にも可なりの量が含まれてゐる。(第三章(問45)の食料品成分の比較表参照)

〔問7〕 動物質蛋白質と植物質蛋白質とは同様に同化吸収せらるゝか。

〔答〕 否、これを食する動物の種類によつて異なる……動物質食物と植物質食物との中にたとへ同一分量の蛋白質が含まれてゐるにしても、これを食する動物の種類(肉食獸と草食獸)によつてこれを消化吸収する力が違ふことを記憶しなければならぬ。故に食物はこれに含まれてゐる成分のみに依つて、その適否を決定するわけには行かぬ。

尙食物の配合に依つても營養價値が異なるものであるといはれてゐる。(拙著「優秀犬作出の理論と實際」第十二章第二節参照)

〔問8〕 礦物質はどんな役目をし、どんな食物中に含まれてゐるか。

〔答〕 主として骨と分泌物とを作る。凡ての食物中には含まれてゐるが、特に赤身の牛肉に多い……詳しくいへば、動物の骨、齒及血、乳、消化液の如き分泌物を形成し、又凡ての身體組織内に存

在するものである。動物の体内にありふれた礦物質は磷酸石灰と鹽類である。磷酸石灰は骨の基礎で、鹽は骨、消化液と血との要素である。凡ての食物にはいくらかの礦物質は含まれてゐるが、特に脂肪なき牛肉には具合よく含まれてゐる。就中磷酸石灰は骨を強大に作る爲に肝要なるものであるから、牝犬の妊娠中又は哺乳期間並に仔犬の發育期には添加してやることを推奨する。

〔問9〕炭化物(含水炭素と脂肪)はどんな食物に多く含まれてゐるか。

〔答〕含水炭素(澱粉質)は穀物や野菜に、脂肪は穀物や多脂の肉に含まれてゐる。

〔問10〕澱粉質と脂肪との效能は。

〔答〕動物に體温と動力とを與へる……言ひかへれば、これは可燃性成分であつて、これだけでは生命を支持することは出来ないものであることを強記しなければならぬ。即ち建設と修繕との役目は是非蛋白質でなくてはならぬ。凡そ澱粉質は犬の肉中には1%より多くは含まれてゐない。脂肪は身體の燃料として或程度迄の量が蓄積せらるゝものである。

〔問11〕三大營養素(蛋白、澱粉、脂肪)は互に代理作用を爲すことが出来るか。

〔答〕然り、或程度迄は交互に代理の働きを爲す……殊に澱粉質と脂肪とは互に密接なる代理を

爲す。尙脂肪や澱粉質が不足するときでも、蛋白質が燃料としての代理をなすものである。但し建設と修繕の役目は蛋白質の外のものでは全然代理することが出来ないことを記憶せねばならぬ。これによつても蛋白質なるものは如何に大切なものであるか、又他に取り代へないものであるかよく判るであらう。而も蛋白質の所要量は極めて大なるものであるのだ——犬の食物として赤身の獸肉が尙ばれるわけが了解せられるであらう。

〔問12〕ビタミンとは。

〔答〕補助營養素ではあるが必要缺くべからざるもの……主要營養素でないから勿論その量は多くは要らぬが、全然これなくしては主要營養素たる蛋白、澱粉及脂肪等も完全なる働きをなさず、従つて發育、保健、蕃殖等に悲惨なる障害をひき起すこととなる。詳細に就いては「優秀犬作出の理論と實際」第十二章第二節にドクトル・ターナーの説明を掲げて置いた。

第二章 犬の血種と食物

〔問13〕高級血種の犬には高級の食物を要するものであるか。

〔答〕 然り、血種の等級に應じて食物を選ばねばならぬ……「血種は口より入る」とか「食物は血種の半なり」とかいふ諺はどこまでも眞理である。抑も高級の血種は高級なる食物（美食といふ意味ではない。以下同じ）の力に依つて改良せられたものであることを知らねばならぬ。それ故、高級血種に對し粗末（不合理といふ意味）なる飼ひ方をすれば犬は退化を餘儀なくせらるゝであらう。何となれば、高級犬は累代の遺傳によつて粗末なる食餌に對しては完全なる消化力を持つてゐないからである。並犬は並食でよいが、高級犬には合理的の食餌を與へよ。

〔問14〕 食物の品種によつて體質が異ふものであるか。

〔答〕 然り、或程度まで異ふであらう……食物の種類は家を建てるときの材料と同じことである。鐵筋とコンクリートとを以て建てた家と、木と土とを以て建てた家とが違ふが如く、動物質を以て飼ふた犬と植物質を以て飼ふた犬とはその體組織に於て可なりの差異を生ずることは免かれない。併しながら、同一の食物を以て飼つたからといつて常に同一の體組織の犬が得らるゝものであるとはいはぬ。何となれば、犬は父母より受けたる遺傳の體質に可なりの差異あるばかりでなく、犬それ／＼は神経系に於ても相異なる個性を有つてゐるからである。平たく言へば、遺傳に於て肥え

型と瘠せ型があり、又個性に於ても好き嫌ひがあるから、同一の食物を以て二ツの犬を飼ふにしても毎に同一の體組織を作るといふわけには行かぬといふのである。

第三章 犬の食物の材料

一通 説

〔問15〕 犬は雜食動物であるか。

〔答〕 然り、現代の畜犬は或程度迄雜食動物である……犬は肉食だけでもよく生存し得るに反し、全然穀食だけでも可なり長く生きてゐるものである。しかしながら、大自然は犬を肉食動物として造つたものであるから、全然穀食だけで飼つてよいものには今尙化せられてゐない。否、むしろ肉食獣の形で残されてゐる。故に主として動物質を以て飼はねばならぬことが理解出来るであらう。

〔問16〕 犬が肉食獣の形で残されてゐるといふ證據は。

〔答〕 消化器が小さく、齒は肉食型、消化液の質及濃度も違ふ……凡そ草食動物の胃腸は容量大な

る穀草を容れ得る如く大であり、肉食動物の胃腸は唯栄養の凝集したる肉類を容れるだけの容積しか持つてゐない。今日の畜犬の胃腸も依然として小さなまゝであるのだ。齒の形は一見して知らるが如く純然たる肉食動物の持つものと同じで、これは穀菜を咀嚼するには適しない。又唾液を始め凡ての消化液も肉類や骨を消化するには適してゐるが、澱粉質のものを消化するにはあまり適してゐないのである。その他色々の差異があるのであるが、兎に角、我々の畜犬には動物質を主とする混合が最も適するといふことになる。

〔問17〕 犬に對して肉食と穀食との實驗の結果。

〔答〕 肉食だけのものは完全なる健康を保ち得るも、穀食のものは弱くなる……これは組織立たた試験から得た報告であるのだ。實際に於て犬は動物質の物は好んでこれを食し、身體に過剰の脂肪分を留むること少く、筋肉の強健と骨格の増大を來たすものである。植物質の物も犬體の肉を増すものではあるが、これはその組織を弱くし耐力を減ずる。殊に澱粉質の過多の使用は多産を損ずるのみならず、分娩時の元氣に乏しく難産に陥らしめ易きものである。之に反して蛋白質の食物は多産を來し、且つ元氣な仔を産むものであることは確かなる實驗の結果である。

〔問18〕 肉食を多くすれば、犬は癡狂に傾くものであるか。

〔答〕 否、さうではない……反對に犬は栄養がよくなり嬉々として主人の命に服し、満足なるコンディションを發揮するものである。即ち悍威に富む、引緊つた體勢を持つ。詳しくいへば、多く肉食する犬は才智、勇敢、耐久、活潑等の性を充分に發揮する。これは健康、美觀、使役價值及長命を保證するものであるのだ。しかしながら誤つてはならぬ。全然肉食を以て飼ふのが最良であるといふのではない。何となれば、或程度迄雜食化せられてゐるから、全然肉食のみに依れば、凡ての機能及び素質が原型に逆戻りするであらう。即ち野生的の犬になつてしまふであらう。

二 動物質の食物

〔問19〕 牛肉の營養價值は。

〔答〕 最上である……何といつても犬の食物としては脂のない牛肉に勝るものはない。これは質が緻密で、蛋白質が多く、且つ赤い血球を澤山含んで居り、又適當なる礦物質やビタミンなども可なり有つて居る。而も同化し易きものであるのだ。脂のない牛肉は約二〇%の蛋白質を有つ。

〔問20〕 馬肉と牛肉との比較。

〔答〕 悪い馬肉は良い牛肉と同価値を有つ……即ち蛋白質に於て少くも二〇%を有ち又消化に於ても敢て牛肉に劣るものでない——人の食物として同価値であるといふ意味ではない——しかしながら、實際に於ては、馬肉は不健康なる老廢馬から取ることが少くないことに注意すべきであらう。

〔問21〕 犬は稍變敗したる肉を食ふも差支へないか。

〔答〕 多くの犬はこれを食べふものであるが、それは勿論よくない……犬は肉を嗜むの結果、新鮮なる肉が與へられない場合、又は習慣によつて腐敗に傾いた肉を食ふものである。腐肉より來る所謂プトマインの中毒に對して犬はかなりの抵抗力を有つてゐるやうではあるが、多くの場合下痢を起すことは掩はれざる事實である。これは料理法に依つて或程度迄の害は避け得るであらうが、新鮮なる肉と腐敗に傾きたる肉との價値を混同してはならぬ。

〔問22〕 肉の見分け方。

〔答〕 新鮮なる良い肉は弾力があり、水氣が少く、臭氣がない……指にてこれを壓すれば強き弾力を感じず。肉の表面は濕つてゐるといふよりも、むしろ乾いてゐる。唯指先に僅かの水氣が附くだけ。

又全然臭氣のないものは新鮮にして而も良質の肉であると認めてよい。これに反して、不良なる肉は(一)褪せたる石竹色、(二)濕つて軟かく、(三)惡臭を放つ(特に煮るとき惡臭が甚しい)。

〔問23〕 生肉使用の利害。

〔答〕 寄生蟲傳染にさへ注意すれば生肉が一番よ……Dr. Bury Knightの如きは試験の結果を發表して生肉の使用を推奨してゐる。又熟練なる多くの飼養者は生肉の營養價の高きことを認むるものである。しかしながら、生肉を用ゆるものとすれば、晚かれ早かれ、體內寄生蟲に取り附かるゝことを覺悟してかゝらねばならぬ。肉の組織中に小さな黄色の包蟲が見らるゝことは日常決して少くない。これは條蟲寄生の兆であつて、且つこの包蟲は半煮では死するものでない。これを要するに、生肉は犬の病氣又は營養の恢復期等或特定の場合には勿論平素に於ても寄生蟲の傳染に對して注意をなすならば大に推奨すべきであらう。

〔問24〕 牛の第一胃の營養價は。

〔答〕 營養豊富の食物である……但し牛肉よりも蛋白質は少い。従つて成長率は低いわけであるから小型犬の仔を育てるには都合のよいものである。牛の胃袋は清潔に洗つて煮るときは消化容易

のものである。しかし、牛肉は腹を収斂するものであるが、牛の胃袋は反對に利通の性を有つてゐることを知らねばならぬ。

〔問25〕 牛の肝臓の榮養價は。

〔答〕 榮養價の高いものである……牛肉のやうに蛋白質に富むといふわけには行かぬが、色々の意味に於て榮養價は頗る高い。しかし、肝臓は刺激性に富むものであるから、利通に傾き易い。従つて幼い仔犬にはあまり推奨すべきではなからう。

〔問26〕 牛の血の榮養價は。

〔答〕 可なり榮養價がある……勿論牛肉よりも榮養分は少ないのである。屠牛場から得らるゝ血を用ゆることは一般には嫌はれてゐるが、新鮮なものを適當に料理するならば、これは犬の食物として牛肉に亞ぐものである。Mr. W. I. McCandlishに従へば、自然に放置せられた血が海綿狀に固まつてしまつたものは用ゆるに適さない。新鮮な流動體のものを蒸気で料理し、蒸氣を通ずる間、時々水分を捨て、然る後暫時火に掛けて乾かすべきである。

〔問27〕 骨の榮養價は。

〔答〕 生の骨は脂肪と蛋白質とを含み、特に礦物質に富む……これは犬の好んで食するものであるが、あまり硬きものを與ふるときは齒を損するものであることを知らねばならぬ。骨は軟かくして噛み易き大なるものを尙ぶ。これは齒の掃除の爲めにも齒を丈夫にする爲めにも必要な條件であるのだ。烏や兎の骨の如き小さき鋭き碎片になり易きものは胃腸を傷け、これが爲め小型犬や仔犬が死んだ例は決して尠くない。注意すべきことであらう。

従來犬に骨を給してはゐるが、恰も小兒の「おやつ」のつもりで、又仔犬の「おもちゃ」半分に硬いものを與へてゐるものが少くないやうである。こんなことでは不充分といはねばならぬ。抑も骨は肉類と米と共に犬の爲めの三大食品であることを筆者は強く唱道して置きたいのである。

〔問28〕 骨は何時與へるがよいか。

〔答〕 食後にこれを與へるがよい……空腹時に與へるのはよくない。

〔問29〕 骨粉の榮養價は。

〔答〕 製法によつて大なる差違がある……生のまゝ製粉したものは、生の骨とさ程異ならざる榮養價を持つものであるが、蒸汽や煮沸によつて作つたものは榮養價は大部取り去られ、唯骨質だけ

が残されてゐる。それ故仔犬に對しては胃を損ふものであつて、多く用ゐるよりも用ゐぬ方がよい位のものである。

〔問30〕 牛乳及び山羊乳の榮養價は。

〔答〕 哺乳間母乳の不足を補ふ爲め最も大切なものである……抑も乳は何れの哺乳動物にあつても初生仔の爲に必要缺くべからざる天然の食物である。

牛乳や山羊乳は蛋白質も礦物質もあり又脂肪質も含んでゐるから、犬の乳に代用するの價値が大である。但し次の表に據れば、犬の乳は牛乳に比して仔犬の爲めには殆んど三倍の榮養分を持つてゐることが判るであらう。それ故牛乳は粉末乳を加へその濃度を約三倍に強めて用ゐなければならぬ。何となれば、そのまゝの牛乳では犬の胃腸を徒に苦しめ、而も榮養不足に陥ゐるからである。山羊の乳を用ゐる場合には牛乳よりも濃度が強いといつてもやはりこの注意は必要である。

乳の種類		乳の成分 (獨逸ケーニヒ著「人の榮養物と贅澤物の化學」から抜萃)					
種類	成分	水	固形分	蛋白質	脂肪質	含水炭素(乳糖)	鹽類
牛乳		八七・二	一二・八	三・五	三・六	四・九	〇・七
山羊乳		八五・七	一四・三	四・三	四・八	四・四	〇・八

〔問31〕 完全に離乳した仔犬や成犬に對して牛乳の榮養價値。

〔答〕 價値が極めて少い：普通の牛乳の八四%乃至九〇%は水であるから、牛乳から滋養を攝る爲めには極めて大量を用ゐねばならぬことが首肯せらるゝであらう。

未だ完全に離乳せられざる當時には、粉末乳に依つて濃くせられたものを用ゐることは、天然の要求に合するものであると同時に、最早固形物を攝ることが出来るやうになつたものに對しては、滋養分の凝集したる食物(肉)を攝ることが最も合理的のものでなくてはならぬ。不幸にも多くの人々は何時までも牛乳に依頼しこれを以て最上の食物と誤認してゐる傾はなからうか？ もしなしとすれば幸である。これは強く注意を促して置きたい。(第十章(問124)参照)

〔問32〕 脱脂乳及びバターミルクの榮養價は。

〔答〕 兩方とも牛乳よりは榮養價が低い：脱脂乳とは牛乳よりクリームを抜き去つたもの。バター

ミルクとはクリームからバクを取つた渣である。

この二ツのものはその栄養價に於ては概ね同等であるが全乳に比すれば栄養價の低いものであるから、犬の食物としては添加的——副食物的に用ゐらるゝものであらう。

〔問33〕 コンデンス・ミルクの栄養價は。

〔答〕 止むを得ざる場合の外牛乳に代用すべきものではない。コンデンス・ミルクで仔犬を育てれば、よく肥えて一時は良好なる發育を爲すものである。しかしながら、この肥えるといふことは脂肪過多のお蔭であつて、實際は活力乏しく、間々、下痢にさへ傾くものであるのだ。(Mr. Nichollsの實驗報告)

しかしながら、Mr. G. Douglas Kerr に従へば、コンデンス・ミルクはより多くペプトンを含んでゐるから、胃の不調のときには生牛乳よりも却て良いと。

要するにコンデンス・ミルクなるものは、新鮮なる牛乳が得られない場合の外、決して推奨すべきものではない。

〔問34〕 粉末牛乳又は乾燥牛乳の價値。

〔答〕 水分を取り去つた牛乳と概ね同等である。全クリーム粉末は湯を以てこれを溶解すれば煮た牛乳と殆んど同じものであるから、全乳の濃度を強める爲にこれを用ゐることは至極便利といはねばならぬ。

〔問35〕 粉末乳の種類。

〔答〕 (一)全クリーム粉末 (二)半クリーム粉末 (三)脱脂粉末。等があつて、その成分は各々異つてゐる。全クリーム粉末は牛乳の濃度を強めるに適當である。

牛乳を犬の乳の濃度に強める大體の見當は、牛乳の量の約二割半の全クリーム粉末を添加すればよす。

〔問36〕 生卵の栄養價値は。

〔答〕 牛乳よりも更に濃厚であるが、犬の乳よりも稍薄い。これは消化し易き滋養物であるから離乳前後の仔犬又は病犬の爲めに推奨すべき價値が高い。殊に食慾乏しき病犬に強制的に食物を攝らしめんとするに際し最も便利なることは生卵の特長である。又生卵は仔犬の爲め牛乳より牛肉に移り變る時の中繼としてこれを用ゐれば、消化器を害する心配なくして而も成長を速かならしむる

實力を有つてゐるものである。

〔問37〕 魚肉と牛肉との比較。

〔答〕 魚肉は一般に牛肉よりも栄養價が少いが牛肉に亞ぐものである。元來魚肉といつてもその種類には多種多様なものがあるから、一括して言ふわけには行かぬ。しかし自身の魚肉——脂肪少なき魚肉は概して牛肉に亞ぐ價値を有するものである。殊に魚肉には沃度分を澤山含有して居ることを特色とする。而もこの沃度なるものは栄養上極めて大切なる役割を有つものであることが近頃分つた。故に牛肉を得難き場合又は食物に變化を與へんとする場合には有利なる代用品であらねばならぬ。否、我國にあつては大いに推奨すべき犬の主食物であるであらう。

〔問38〕 肝油の功用。

〔答〕 これは成長に益する添加食品である。その他尙瘵病に傾かんとする幼犬、病氣の恢復期にある犬又は老犬に與へて效能が著しいものである。その用法は一日一回又は二回極めて少量を食餌に混じ又は食後別に與ふべきである。最初は茶匙一杯より初め、もし必要あらば、下痢を起さざる程度に一定限度迄漸次その量を増すべきである。

元來肝油は普通犬の胃には受け附け易きものではあるが俄かに多量を給すれば下痢を生じ且つ胃を害するであらう。しかのみならず、或一定限以上にこれを給することは栄養學理上却て害あるものであることが近頃唱道せられてゐる。

〔問39〕 犬の食物として殘飯殘菜の價値。

〔答〕 自家のものは大に利用すべきである。しかしながら、旅館、料理屋等のものはこれを利用するに方つては決して油斷してはならぬ。それは敢て栄養價値が少いといふわけではないが、陶器硝子等の破片その他犬の爲めに危険なる異物が混入してゐるからである。例へば鉢を洗ひたる水が混入するときは石鹼や洗粉の汁が混入する處があり。又不良なる殘物中には有毒なるものが發生し易きことも考へなければならぬ如きである。

實際料理屋の殘物で犬を飼へば、色々の病氣の原因をなすことが決して尠くない。要するに料理屋の殘物は多くの場合安心して利用し得るものでないであらう。

之に反して兵營又は學校寄宿舎より生ずる甲種の殘物には右の如き危険がないから、大に利用するの價値があるといはねばならぬ。

三 植物質の食物

〔問40〕 米の栄養價は。

〔答〕 米は植物質食物の中で最も栄養價の高いものである。米は多量の澱粉質と少量の窒化物、脂肪及礦物質を含んでゐる。煮た米の澱粉質はよく消化せられ、他種の穀物の如く下痢的傾向が少いものである。むしろ腹を収斂するものと一般に考へられてゐる。實際はその中庸を得てゐる食物といふのが正しいと思ふ。

我國に於ては最も汎く、最も多く米が利用せられてゐるが、これは混食の材料として慥かに價値多きものであることは疑ふの餘地がない。されど茲に注意を促したいことは、高級犬に對しては米を混用すると共に可成動物質の量をより多く混じりたいといふのである。

更に注意したいことは、我國に於て近頃わざ／＼オート・ミールを作つて犬に與ふるものがあるやうであるが、それは西洋流に盲従したる誤といはねばならぬ——再び言ふ。穀物の中では米が一番栄養價が高く又犬の爲にも消化し易く且つ腹具合も最も良好なるものであるのだ。

〔問41〕 小麥粉は。

〔答〕 犬の爲め比較的消化し易き澱粉質食物である。これは普通パンやビスケットの形に於て用ゐらるゝであらう。古いパンは消化良好であるが、新しきものは犬の胃に於ては重く固まるのであるからあまり好しくない。故にビスケット色に焼いたものを推奨したい。

これを要するに、西洋料理屋等の残りパンは清潔なるものさへ選べば米飯に代用してもよいものである。

〔問42〕 ドッグ・ビスケットは。

〔答〕 本式に犬を飼はんとする人に推奨するには足らぬ。ドッグ・ビスケットといつても、その原料（小麥粉に魚粉又は獸類の臟物等を混入）には色々あるであらうから、一概にその栄養價値を云々するわけには行かぬ。しかし、いづれにしても犬の爲めに自ら調理することの出来る人が賞用すべきものではなからう。言ひかへれば、生の肉類や米飯等を調理するの手續なき人が止むを得ず用ゐる簡易食料に過ぎない。然るに我國の人にしてドッグ・ビスケットといへば犬の爲めに高級の食料なる如く考へ、さも満足らしくこれを以つて犬を飼ふものがあるのは何かの錯誤であらねばならぬ。

ドッグ・ビスケットに就いて特に注意しなければならぬことは、色々の藥物（瀉利鹽、芒硝、硝石、硫黄等）を混入せられあることである。これ等は健康な犬の消化を助くるものでもなく、又栄養價に於ても信頼し得るものでもない。況んや病犬に對してはむしろ有害であるかも知れぬ（第十二章（問13）参照）就中礫砂の如きは少量にても犬の食物に混入せらるゝときは極めて有毒であることを知らねばならぬ——平たく言へば、ドッグ・ビスケットは下宿住居の人が小型犬を飼ふとき用ゐる食料であるともいへる。

〔問43〕 大麥は。

〔答〕 小麥よりも消化あしく又栄養價も少ない……むしろ下痢し易きものであるから、好んで用ゐるべき食料ではない。殊に胃腸を害しある犬には慎むべきである。

〔問44〕 馬鈴薯は。

〔答〕 殆ど利用すべき價値がない……何となればその四分の三は水分であつて、その他は澱粉質を主とするものであるからだ。換言すれば、馬鈴薯なるものは犬の食物としては容量を極めて大ならしめ而も栄養價が少ないから、害あるも利は少ないといふのである。肉食を主とし之に若干の馬鈴

薯を添加する西洋式のやりかたを嚥吞にしてはならぬ。

〔問45〕 野菜類は。

〔答〕 これは本格式に犬の食物ではない……多くの犬がこれを食べ、又多くの人がこれを犬に用ゐるも、これは絶対に犬に主要栄養分を供給する爲めの食物でないことを覺らねばならぬ。唯適當なる野菜の少量を用ゐることは配合の變化を助け、又ヴィタミン等を補給するに便利といふに過ぎない。例へば飼ひ過ぎの犬、運動不足の犬にこれを與ふれば親切である如きである。

決して多量の野菜を給してはならぬ。これは病氣を誘引し害あつて益なきものであるのだ。たとへ、犬が野菜を同化するだけの機能を持つてゐるにしても、容量大なる野菜は犬の胃腸に入るにはあまりにも過大であらう。——水分極めて多き野菜！ 犬の攝り得る量の中には眞の栄養分は無一物といひたい野菜！ これは犬に對する眞の食物ではないのだ。次表を参照すれば思ひ半に過ぐるものがあるであらう。況んや犬は植物質に對する同化力は驚く程弱いものであるにおいておや。苺は野菜のピフテキであり、バナ、は分析上肉よりも成分が高いからとて、犬にこれを與へるのは馬の骨を大きくせんが爲、牛骨を馬に與へると同一の愚を學ぶものでなくてはならぬ。

然るに犬界の實際を見るに、犬の爲めに野菜はなくてはならぬものと思ひ込み、經濟的にも無理をして態々多量の野菜を給する人が少くないやうである。これはいふまでもなく人間と犬とを混同したる營養學問の淺薄さを物語るものでなくて何であらう。自白すれば、筆者も以前は犬に野菜を與ふることを以て理想とさへ考へたことがあつた。又西洋の書物を見ても普通これを推奨するものであつたかに記憶する。然るに近來その愚の甚しきを覺り、西洋の權威の説もこれに一致することを見て、試に野菜皆無にて仔犬を育成するに寸毫の損失も生ずるものでないことを確信することが出來た。しかしながら、少量の野菜を調味料として添加することは敢て無意味であるといふのではなう。

食料品成分比較表 (北米合衆國政府試驗局の分析表より抜萃) (成分%)

種	類	水	蛋白質	脂肪質	含水炭素	礦物質
牛	肉(頸)食用に堪える部分	六三・四	一九・二	一六・五	—	〇・九
同	(肋)同	五五・四	一六・九	二六・八	—	〇・九

同	(臀)同	五六・七	一六・八	二五・六	—	〇・九
同	(脛)同	六七・八	一九・八	一一・五	—	〇・九
馬	肉(後軀)同	七三・二	二一・六	三・一	一・〇五	一・一二
同	(胸)同	六一・四	二一・三	一五・六	〇・七四	〇・九七
同	(並物)同	七四・三	二一・七	二・五	〇・四六	一・〇一
骨	骨髓や血の附いた普通のもの	五〇・〇	一一・四	一五・七五	—	二一・八五
鮭	食用に堪える部分	七三・四	一八・二	七・一	—	二・三
牛	乳	八七・一	三・二	三・九	五・一	〇・七
粉末牛乳	(全クリーム)	二・〇	二五・四	二八・五	三八・三	五・八
同	(半クリーム)	二・〇	三〇・一	一七・〇	四三・七	七・二
鶏卵	食用に堪へる部分	七三・八	一四・九	一〇・五	—	〇・八
小麥粉		一一・六	一一・八	一・一	七五・一	〇・九
米		一二・四	七・八	〇・四	七九・〇	〇・四

米飯		五二・七	五・〇	〇・一	四一・九	〇・三
白パン		三一・〇	九・九	一・四	五七・一	〇・六
キャベツ	食用に堪へる部分	九〇・三	二・一	〇・四	五・八	一・四
ニンゲン	同	八八・二	一・一	〇・四	九・二	一・一
チヤガイモ(生)	同	七八・九	二・一	〇・一	一八・〇	〇・九
カブラ	同	八八・九	一・四	〇・二	八・七	〇・八
ハウレンサウ	同	九二・四	二・一	〇・五	三・一	一・九

もし野菜を主張する人ありとせば、試みに彼れの愛犬の口中を一瞥せよ！ 多量の野菜を給せらるゝ犬の口中は多分その粘膜が蒼白き被膜を以て掩はれてゐることを發見するであらう。多くの肉類を以て飼はれる犬は輝く薔薇色の舌を有つてゐる。赤い透き通る様な舌は肉類を多給せらるゝ犬の有つ特徴であつて、これは健康のシンボルであるのだ。

四水

〔問46〕 飲用水は何故必要か。

〔答〕 水分は絶えず犬體から排泄せられるものであるから、これを補はねばならぬ。抑も犬の體重の約半分は水である。それは體内に栄養分を循環せしめ、又體内の老廢物を體外に排泄する爲め必要な作用を爲すものである。しかも、この水分は絶えず身體から放散するものであるから、常に新鮮なる純良水に依つて口よりこれを補はねばならぬ。

〔問47〕 飲用水は常に備へ附けて置くのがよいか。

〔答〕 然り、犬が常に自由に飲み得るやうに備へ附けて置くのがよい。何となれば、犬の胃は一時に多くの水を入るゝやうに出来てゐないからである。もし、一日一度か二度しか水を與へぬものとすれば、止むを得ず一時に多く飲み過ぎることとなる。これは病氣の原因をなすであらう。實際に於て一日一、二回水を與ふるものと、絶えず水を供へ附けてあるものと比すれば、後者は食慾旺盛となり體重を速かに増加するものである。但し理想からいへば、食前食後約一時間半の間は飲水を控へしむる方がよい。しかしながら、實際に於て絶えず水が供へてあれば、食前又は食後に於て一時に多く水を飲むものではないから、このことに就いては顧慮する必要はないであらう。

〔問48〕 飲水の量は何に關係するか。

〔答〕 同一の環境に於ては食物の種類と運動の量に關係することが大である。勿論犬の種類や個性に關係することは決して少くない。食物の種類よりいへば、水分の少い鹽氣の多い食物を攝れば自然多くの水を飲み、運動を多く課すれば是れ亦多くの水を要するであらう。又暑き季節には寒き時よりも一層多くの水を飲む事はいふまでもない。以上諸關係が全部同一である場合、より多く水を飲む犬は概して身體が弱いかそれとも健康が不調であるやうだ。しかしながら、良き母は多くの水を飲み多くの乳(七五%は水)を出すものであることを知らねばならぬ。

〔問49〕 運動後の水飼ひに關する注意。

〔答〕 身體過熱の時俄かに多くの水を飲ませぬこと。劇しき運動後は犬は大に渴を覺ゆるであらう。この際俄かに多量の水を飲ましてはならぬ。殊に空腹の時に於て然りとす。最初は唯口を濕ほす程度に水を與へ、體熱が平温に復するを待つて犬が欲するだけ飲ましむべきである。

〔問50〕 飲用水の品質に就いての注意。

〔答〕 新鮮にして純良の水を給せねばならぬ。石灰質多き水は犬の胃を害するものである。元來

凡ての犬は水の品質を判斷する性能を缺いてゐるものであることを知らねばならぬ。それ故唯犬の判斷に任することは危険であるであらう。或人は飲用水の中に色々の藥物を添加するやうであるがこれは利なくして害あるものといはねばならぬ。蓋し藥物の種類に依つて犬は思ふだけの量を控へ勝ちとなり又反對に必要量外餘分に飲み過ぐることとなるであらう。故に可成新鮮なる眞水、日光に長く曝らされない清涼なる水を與へねばならぬ。

第四章 食料に關する雜件

一 食物の固さと容量

〔問51〕 食物の固さは。

〔答〕 或程度まで固い食物が必要である。元來軟い食物は犬の食物ではない。常に軟い幼犬食を以て成犬を飼ふときは、齒と齒齦を衰損せしむるものである。之に反して或程度迄固い食物は齒を強くし、齒を掃除し且つ唾液の分泌を助け得るものであるのだ。

Mr. A. J. Sewell は云ふ、これが爲特に骨を興へない時は固きビスケットを興へるがよい。尙骨を興へることに就いて注意すべきことは、

(一) あまり堅い骨をやらぬこと。

(二) 四六時中骨を噛ませないこと。

これは却て害あつて益のないことであるから、無暗に大きな堅い骨を犬舎の中に投げ込んで置くが如き誤つた慣習は改めたいものである。

〔問52〕 食物の汁氣は如何なる程度を適當とするか。

〔答〕 汁氣は可成少なくなるがよい……

(一) 一般に汁氣の多い食物は充分に咀嚼せらるゝことなくして、嚥下さるゝものであるから消化を不良ならしむるものである。

(二) 汁氣多きときは自然食物の容量を大ならしむるの不利がある。のみならず

(三) 水氣多き食物は水氣多きだぶりの犬を作る。又

(四) 幼犬にあつては數々下痢の原因をなすものである。これを要するに食物は或程度迄固くし

て汁氣少き状態となし、犬をして充分に咀嚼せしむべきである。而も犬體に要する必要な水は食間に於て犬をして自由に補給せしむればよい——犬は時々少量づゝ飲水するものであつて、食物と共に水を攝らなければならぬことはないのだ。

従來動もすれば、汁氣多き食物を用ゐるの傾向があつた(英國あたりでも同様)。又犬自身としても食べ易い關係からお茶漬式に平氣でこれを食するものである。しかしながら、今やその弊害を悟ることとなり、多くの賢き畜犬家は汁氣の少き食物を以て肉の緊つた犬を作る事に成功してゐる。

(尙、次の問答参照)

〔問53〕 食物の容量と消化力の關係。

〔答〕 或程度迄の容量を保たねばならぬが過大ではいけない……滋養分の寡多といふことは別として、食物は或程度(胃の容積の七、八分目)迄の容量を保たねばならぬ。然らざれば、物理的にも消化器を活潑に働かしむることが出来ないし、又消化液を充分に作附せしむることも出来ない。しかしながら、我々の興ふる食物の多くのものは犬の胃に對して容量が小さいことを憂ふるよりも、むしろ容量が大であり勝ではなからうか。水分多き食物は犬の體内を素通りするのみならず、體内

消化器官の徒勞をなさしむるものであることを知らねばならぬ——犬の消化器はかくも小さなものであり、又過分の食物が胃より腸に素通りするのは食後數分を要せぬものであるのだ。

二 食物と消化力

〔問54〕 消化し易き食物といふこと、栄養に富む食物といふことは同一意義であるか。

〔答〕 必ずしも同一の意義ではない；或る場合には多分一致することもあるであらうが、常に同一意義と解すべきでない。今假に極めて僅かな力を以て消化し得る食物のみを以て犬を飼ふものとするれば、その犬はやがて蒲柳の質となるであらう。こんな種類の食物を所謂美食といふのである。抑も美食なるものは必ずしも栄養を完全ならしむるものでなく、又これに含んでゐる栄養分を完全に用ゐ盡さすものでもない。

食物の中に含有してゐる全部の栄養物を完全に同化吸収せしむるといふことが食餌の大切な使命であるのだ。是に由つて之を觀れば、消化器に非常の過勞をなさしむる食物はこれを避くべきであると共に、極めて僅かな消化力しか要らない食物を以て習慣的に健康なる犬を飼つてはならぬ。

元來消化といふことは天然の手段であつて、健全なる消化器は充分にこれを働かすことによつて更に健全に發達せしむることが出来るものである。それは宛も犬の軀軀四肢に於ける運動と發達との關係と同じことであるのだ。

故に病氣の犬に對しては眞に消化し易き食物を第一義として與へなければならぬが、漸次回復するに従つて、活潑なる胃の働きを起すやうに再び相當の消化力を要する食物を、徐々に仕向けることがその場合大切である。

胃には或程度迄大なる仕事をなし得る食物を與へよ。而も胃を過勞せしむるものではないけない。

〔問55〕 犬の消化液と草食動物の消化液との差異。

〔答〕 可なり大なる差異がある。犬の消化液は動物質のものは容易に消化し得るも、植物質のものに對しては案外弱いものである。然り、犬は夫の堅き馬肉や硬き靱帶や固き骨を比較的容易に消化し得るにもかゝはらず、軟き野菜や穀類に對しては消化の力が驚く程弱い。

我々は犬の糞を検査することに依つてこの事實を立どころに了解することが出来る。序ながら、犬の糞を検査するといふことは、犬の健否を知り、又その食物の取捨選擇に就いて最も良き指針を得



るものであることを忘れてはならぬ。

〔問56〕 犬の嗜好の大小によつて消化力が違ふか。

〔答〕 一般に好きな食物はよく消化吸収せらるゝものである…それと共に嫌ひな食物はたとへ栄養量は多くても消化吸収せらるゝことが少ない。

近來色々の動物に就いて色々の食物の消化率が大いに研究せられてゐる。その試験成績を綜合すれば、最大の消化力は、その動物の爲めに最大の栄養量を有する場合に、發揮せらるゝものである事が判つた。又多くの場合、一般に動物が嗜むものが栄養量の大きなるものである事はつきり判つた。犬の最も嗜む食物は何か。動物質、殊に牛肉をどの犬もく最も好むものである事は何人も異存がなからう。之に依つてこの種食物が、犬の爲めに立派なる筋肉組織や骨を建設し、最大のエネルギーを供給するものであることが自ら首肯出来るであらう。實際に於て牛肉は犬の爲めに最もよく同化吸収せられ、最もよきコンディションを興ふるものである事には疑ひを挟むの餘地がない。

〔問57〕 肉は細く切つたものがよいか。

〔答〕 肉塊のまゝがよい…細切りの肉は多分犬がそのまゝ嚙み下すものである。故に肉類は犬が

咬み切ることを餘儀なくせらるゝだけの肉塊のまゝ興ふるのが理想である。誤解してはならぬ。中途半端の肉片ではあわてゝ犬は眼を白黒にして嚙下することがあるから用心したい。

硬き馬肉が消化せらるゝことなくして時々糞中に現はるゝを見て、馬肉は消化不良であるなどいふ人があれば、その人は切り方の不適當なる肉を興へてゐるのではなからうか。

〔問58〕 犬の消化時間と栄養との關係。

〔答〕 消化時間の長短は強ち栄養の多少を意味するものではない…が、犬の大小、健否等に對する食物の選擇上の参考として、消化時間の大略を承知して置くことは有利である。

(一) 普通牛肉は一〇時間乃至一二時間(脂肪分の多い牛肉は赤身のものよりも多くの時間を要する)。

(二) 腱、皮膚、軟骨等は極めて徐々に。

(三) 澱粉質のもの(米及びその他の穀粒)は八乃至一〇時間。

(四) 牛乳は人類にあつては速かに消化するも、犬にあつては比較的遅い。

(五) 卵白は實際消化時間を要せずして直に吸収せらるゝものである(これは前者と全然反對)。

第五章 食物の選擇

一 配合と變化

〔問59〕 犬を飼ふには肉だけでよいか。

〔答〕 普通混合食が最もよい(〔問18〕參照)……Mr. R. E. Nicholasの組織立つたる實驗の結果に徴すれば、犬は赤身の牛肉だけでも良好なる健康とコンディションを保ち得るものである。しかしながら、これに若干の脂肪を添加すれば一層健全なる状態を發揮することが出来ると。更に同氏は結論として言ふ……されど一般には混合食が最もよいと。

混合とは肉類を主とし、これに米又はパンを混じたるものであつて更に骨を給するものをいふ。何故混合食がよいか？ 現代の我々の畜犬は大いに家畜化せられてゐるから、混合食は多くの場合犬の嗜好を平均にし、食慾と消化力とを増進振起せしむるからである。

Dr. A. J. Sewellは、犬に肉食せしむることを推奨することに於て世界中で決して人後に落ちない

い人であるが、同氏の説に依るも、單に肉のみよりも混合の方が犬を長命ならしむるものであると肯定して居る。しかしながら、同氏の試験によれば、肉を多く攝らなかつた老犬に肉食を給するに依つて彼の生命を延べ得るものであるといふのを見ても、一般に肉類の量を多く用ゐることを切に推奨するものである。

〔問60〕 食物は度々變化を與ふる程よいか。

〔答〕 あまり複雑なる變化を與ふるのはよくない：抑も如何なる動物でも、その主食に複雑なる變化を與ふることは榮養學理からいつても將又實際上からいつてもよくないことが判る。これは從來筆者の主張する説であるが、普通の考へ方と一寸異つてゐるのであるから是非一ツ試していただきたい。吾人の主張に従へば……

いくら卓越したる品種を以て變化するにせよ、動物は生理的に將又習慣上頻繁なる變化を喜ぶものではない。天然の動物を見よ。饑餓に逼らざる限り、不斷食する狭範圍の食物以外の物は容易に攝らぬものであるのだ。多分魚を釣つた經驗のある人はこの關係をよく了解せらるゝであらう、魚は川によつて餌を異にする。従つて甲の川では良い餌でも乙の川ではそれでは釣れない。野獸も亦

然り、多くの家畜も亦然りである。

犬は唯一種の食物を以て飼ふてさへ、長年月の間よく榮え得るものであることが組織立つた試験の結果證明せられた。それ故前に述べる混合食を以てすれば一年を通じて何等の變化を與へるの必要がない（季節等に應じて全體の量や配合の率に多少の手加減を要するとするも）。これを是れ眞の定食といふのである。あまりにも人工的變化の多き食物、即ち眞の定食を以て飼はれざる犬こそ、飼主の親切を甚だ迷惑に感ずるものであらねばならぬ。人間と犬とをあまりにも混同誤解してはならぬ。

しかしながら、この定食に對して時々色々の野菜を添加するなどは嗜好の上からいつても又ヴィタミン等の補給の上からいつても將又便通調節の上からいつても有利なるものと認める。しかし、是非なくてはならぬものではない。野菜を以て主食物の一大要素であると考へてゐる舊思想から、今や我々は脱出しなければならぬ。筆者はこの見地の下に野菜なき混食を以て多くの仔を育て、多くの成犬を飼つて見たが、寸毫の故障も生ずるものでないばかりか、健全なる發達をなし得るものであることを確認する。

兎にも角にも、徒に繁雜なる献立に焦慮してはならぬ。かくの如きは犬をして美食の惡習に陥らしむるばかりか、犬體の爲めにも眞の利益を齎らすものではない。

一般原則としては、變つた食物はその品種の優劣を問はず、犬の消化器を損ふものであることを知らねばならぬ。殊に空腹時にあつて然りとす。

もし、何かの必要で常食に變化を與へなければならぬ場合には、極めて徐々にこれを仕向くべきものであることを忠告せんとするものである。

以上述ぶる所は各種の犬を通じてのことであるが、軍用犬なる立場から考ふれば猶更のことであるといはねばならぬ。

二 犬の個性

〔問61〕 同一種類の犬なら同一の食物で飼へばそれでよいか。

〔答〕 然りといひたいが、必ずしもさうは行かぬ。犬は食物を消化する一の器械的装置でなく、それ／＼異つた神経系統を有ち、而も勝れたる精神作用を有つ生きてる高等動物である。従つて好き

嫌ひのあることは掩はれざる事實であらう。これを千遍一律の食物で飼はんとするは合理的といふことは出来ない。

「或人への肉は他の人への毒である」といふ諺は或程度迄犬に對しても同様である。上手なケネルマンとはどの犬はどの食物で飼ふのが一番良いかといふことを見分け得る人をいふ。即ち犬を食物に適合せしむるものでなくて、犬に食物を適合せしむるものでなくてはならぬ。

〔問62〕 然らば犬の好き嫌ひに應じて食物を選択すればそれでよいか。

〔答〕 原則としては然り。しかしながら唯犬の好き嫌ひに盲從してはならぬ：第一それには合理的の判断を要するであらう。見よ！ 多くの愛玩犬は立派な肉食よりも甘いビスケットを好んで喰ふではないか。愛玩犬といへども甘いビスケットで飼ふならば、間もなく破滅に陥るであらう。しかのみならず、犬の偏倚なる性癖は漸を以てこれを矯正しなければならぬ。殊に軍用の目的に對して痛切にこれを感じるものであるのだ。而も多くの犬は幼犬時代よりも食物に馴致せられ得るものであることを忘れてはならぬ。

右の見地よりするも、幼犬の育成に際しても、あまり複雑なる食物の變化は好ましくない。況ん

や前問答に於て知る如く、この複雑なる食物なるものが犬それ自體に對しても害あつて益なきものであるに於ておや。

以上三問に對する答を綜合すれば、特に軍用犬の爲めに次の結論を見出すであらう。

(一) 可成簡單なる一定混食を以て一律に飼ふのが一番良い。

(二) 特別なる犬に對してのみ特別なる食を與へる。但しこれとても漸を以て一般化せしむべきである。

第六章 食物の調へ方

一 料理法

〔問63〕 生の肉がよいか。煮た肉がよいか。

〔答〕 常食としては煮たものがよからう：元來肉は生のまゝなれば、その成分を破壊せらるゝことなく、又消化も容易であるから、内寄生蟲の傳染に對して注意が行届くならば生肉を推奨するも

のであることを前に陳べた。しかしながら、實際問題としては一般の犬に如斯良質の肉を與へ得るか否かといふことである。多分そんな贅澤は出來ないであらう。而も煮た肉は料理の仕方によつては嗜好を増し、食欲をも振起せしめ得るのみならず、内部寄生蟲の傳播を豫防するの利益がある。ここにいふ料理の仕方とは嗜好を増す爲め少量の野菜類又はその他の嗜好品を添加することを意味する。(第三章(問23)参照)

〔問64〕 肉の煮方に就いての注意。

〔答〕 可成榮養分を失はぬやうに注意せねばならぬ…これが爲めには

(一) 最初より熱湯に入れて煮るがよい。

(二) 大きな塊のまゝ煮るがよい。

(三) 煮汁を多くせぬがよい。

(四) 不必要に長時間煮てはならぬ。

等々であらう。最初より熱い湯に入れて煮るときは、肉塊の表面にある蛋白質が直ちに固まり、内部の養分が失はれないで済む。大きな塊のまゝ煮るのも同一の理由である。煮汁はこれを利用す

るにあらざれば、それだけ肉の養分を失ふことになるから、利用せらるゝ程度に汁は少くしなければならぬ。理想よりいへば、この煮汁を以て米を煮るがよい。又徒に長く煮るときは特にヴィタミンを破壊消失するであらう。

〔問65〕 長時間煮出した肉類は無價値のものか。

〔答〕 決して無價値のものではない…後に残されたる味なき、筋張つた肉片といへども、決して犬の榮養上無價値のものではない。何となれば、その中には最初含んでゐた礦物質の全部と蛋白質の殆んど全部が残つてゐるからである。故に肉の煎汁を採つた場合、又は肉汁を採つた残物も大いに利用すべきである。

〔問66〕 穀類を煮る程度は。

〔答〕 これは肉類と異つて充分煮るだけよい…抑も犬の消化液では一般に穀粒の外皮は極めて消化困難なものである。玄米又は豆類を給したる場合の犬の糞を見よ。不消化の形跡を驚く程認めることがある。しかしながら、これ等の穀粒といへども、煮る前に長く水に浸し且つ長く煮ることに依つて犬の爲にも吸收せられ易き澱粉質と化することが出来るものである。筆者は榮養分豊富な

る關係からして犬の爲には玄米を推奨してゐるが、それは白米よりも長く浸し、水を多くして長く煮ることに依つて穀皮をも充分消化せしむることが出来る。高壓鍋を利用するを得ば更に妙なり。

〔問67〕 犬には温食がよいか冷食がよいか。

〔答〕 犬には温食はいけない。温食は人類の爲めには疲れたる組織を回復するに大いに役立つものであるが、犬に對しては消化器を害し、且つ齒を衰換せしむるものであることを知らねばならぬ。もし、温食を犬に給すれば漸次消化力の弱い、元氣のない鈍重な犬が出来らう。

しかしながら、冷凍の食物も是亦犬の爲めには害あつて利なきものである。これを要するに、離乳暫らくの後までは少しく温めた程度のもがよく、爾後は普通のひや飯程度のもがよいといふことになる。(第十章(問128)参照)

二 嗜 品

〔問68〕 食餌中に嗜品を加ふのはよいか。

〔答〕 或程度迄はよい。元來食欲をそゝる香や美味く食べらるゝといふことは、食物それ自身の

養分を完全に同化吸収せしむる爲に大に助となるものである。(第四章(問56)参照)

畜産家の一般所信に従へば、假令高級の榮養食でも動物が好んで食はないものよりも、平衡のとれた食物であれば動物の好んで食ふものゝ方が一般に良結果を齎らすものであるといふのである。故に鹽、醬油、味噌又は野菜類の添加によつて、嗜好を増さしむることは最良の策といはねばならぬ。勿論これ等の添加物は嗜品として役立つのみならず、或種の榮養分をも補給するであらうが、それはこゝでは別問題としていふのである。

しかしながら、嗜品はどこまでも嗜品であるから、決して極端に走つてはならぬ。もしも、極端に嗜品の添加に走るときは犬に美食の慣習を生ぜしめ、犬は本然好む肉類でさへもそのままでは食欲を缺くことになるであらう。況んや化學的製品乃至は藥物に類する如きものを食餌に添加する如きは極めて愚案といはなければならぬ。(第十二章(問139)参照)

端的にいへば、あまり嗜品的のものに慣れてゐる犬は、眞の榮養物には餓えてゐると言つてもよ

第七章 食事の回数

一 回数と時間

〔問69〕 犬(成犬)の食事回数。

〔答〕 混食では一日二回がよい。西洋の權威者中には一日一回(夕方)説を唱えてゐるものが尠くない。確かに肉食の場合に於てはこれだけの間隔を以て飼ふのが、最もよく犬をして榮えしむるものである。

しかしながら、我々の畜犬の飼料は所謂混食である。従つて榮養分に比しその容量が大であるから、一回に全部を攝らしめんとするは随分無理といはねばならぬ。

抑も人體生理學の證明する所によれば……雜食である人類は數回に分食するのが最も合理的であると判定せられてゐる。犬に於ても混食を給する場合には儘かにこの理に倣ふべきである。元來消化器なるものも、その他の器官と同じく適度の休憩を與へてやらなければならぬものであるが、一日

二回とすれば、肉類でさへも完全に消化し得る時間の餘裕を存することになる。(第四章〔問58〕參照)しかし回数を變更しなければならぬ場合もあるが、これは後に詳述することにする。

〔問70〕 二回の食餌は等分でよいか。

〔答〕 犬の用途に應じて朝夕その量を異にするがよい。即ち夜間用の番犬は夕食の方を軽くし、その他の使役犬は一般に夕食の方を重くするがよい。夕食を重くするときは犬は充分なるエネルギーを準備して晝間仕事に従事することが出来る。のみならず、犬は夜間よく眠り、その間完全なる同化作用が行はれるものである。夜間の警戒に任ずる犬には止むを得ず朝食を重くせなければならぬ。

〔問71〕 成長中の犬や老犬に對する食事回数。

〔答〕 それだけの程度に應じてその回数を増さねばならぬ。くはしくはいへば、幼犬の食事回数は離乳直後の五、六回より成長するにつれて漸次その回数を減じ、約八ヶ月に至り二回となすを合理とす。(第十章〔問124〕參照)又老齡に向ふに従ひ少量づゝにしてその回数(三回又は四回)を増すべきである。蓋し老犬の血液は緩徐に循環するものであるからだ。尙回数を多くするといふ意義は必

らずしも一日の量を多くするといふ意味でないことはいふまでもない。

〔問72〕 日課運動の直前直後に於ける食事は。

〔答〕 一般にこれを避くべきである。食事直後強い運動を課するときは、胃の働を妨ぐるものであつて、食物は胃よりそのまゝ腸に過ぎ去り、消化不良を來たすであらう。又運動に依りて犬が疲勞を覺ゆるときは、犬は食物を攝らぬものであり、又生理作用からいつても稍々休憩した後でなくては食物を消化することが出来ないものである。犬は強き運動後に於ても空腹を感ずるときは時として食物を攝るものであるが、いづれにしても、消化器を完全に働かすわけには行かぬ。然らば運動の前後幾何の時間を置くべきかは運動の量と食物の量とに關係するものであるから、一律の標準を示すことは難しい。概括的にいへば、少くも三十分。多くは一時間位は置きたいものである。

〔問73〕 疲勞後の食事の與へ方。

〔答〕 犬の沈靜を待つべきである。これが爲めには最初少量の水を與へ犬をして清涼ならしめ、眞の水飼ひをなさぬ前に食餌を給すべきである。

又大なる疲勞後には一度に重い食事を攝らしめぬがよい。

疲れた犬を平靜に復せしむるには、布片又は藁を以て犬の身體を充分に摩擦するを最も有效とす。かくすることに依つて、犬體は徐々に放熱し、身體各部の作用を速に復活するものである。

犬が疲勞後感冒に罹ることがあるのは、過熱の爲めではなくて、急に冷えるからであるのだ。

〔問74〕 食事中犬を沈靜ならしむる注意。

〔答〕 犬が興奮する凡ての事を避けなければならぬ。これが爲め

(一) 食事中手入をすることもいけない。

(二) 愛撫することさへも避けたい。

(三) 他犬との交渉を生ぜしめないやうにする、等々一切不要な干渉を避くることが賢明である。

抑も食事中犬が沈靜を缺くときは消化を妨げるものであつて、犬は急いで丸嚥をなすかそれとも食慾を減するものである。

食事に勇まぬ犬でも、氣の散らぬ場所に於て食事せしむるときは案外よく食ふものであることを

我々は經驗してゐる。これは神経系の働きの關係だ。

二 食事の時刻と量の規正

〔問75〕 何故食事の時刻と量とは規則正しくせねばならぬか。

〔答〕 食慾の不規則を來たし消化を害するから：詳しくいへば、これを嚴守することによつて

(一) 食慾にむらが出来ない。

(二) 食食(がつく)の犬とならない。

(三) 胃腸を害しない。

即ち犬は毎回良好なる食慾を以て食事に臨み、或時は食慾が少く、或時は食事時刻前ワン／＼食事をねだることがなくなる。

又長い間空腹で待たさるゝことが度重なると犬は食食の悪習に陥り、必要以外に腹一杯に食事を攝り、或は咀嚼することなく丸嚙みにし、又は拾ひ食ひに傾くものである。尙長時間の空腹は決して消化をよくするものでなくて、胃を弱くし不消化の原因をなすものであるのだ。

要するに時刻と量との嚴守が出来ないならば、良いコンディションの犬、良い習慣の犬は出来ぬものと思はねばならぬ。

いふまでもなく、食事と食事との間に色々の間食的のもの——殊に菓子類を與へることは絶対の禁物である。

第八章 食物の量

一 質と量

〔問76〕 犬が食ふだけの量を與へてよいか。

〔答〕 否、それは多きに過ぎる：多くの犬殊に若犬はこれを與ふれば、自分が消化し得る量よりもヨリ多く食ふものである。又かくすることに依つて多く食ふ習慣の附くものである。

抑も犬の完全なる發達、完全なるコンディションといふものは、よく消化し、よく同化せられたる榮養分の量に比例するものであつて、必ずしも食ふたる食物の量の大なることに依つて得らるゝわ

けではない。故に食物の分量は犬が完全に消化し得る量を以て最大限としなければならぬ。單に犬の意思に任すことは合理的のものではない。腹八分目といふ諺は犬にあつても同様である。

〔問77〕 如何にして食餌の適量を見定めるか。

〔答〕 先づ適量と思ふだけ與へて見て、その様子に依つて判定すべきである。抑も食物の分量なるものは犬それ／＼の個性に従つて甚しく異なるものである。同一種類の犬、同一年齢の犬、同一サイズの犬にあつても食ひ得る食物の量に於ては二倍と二分の一位の差は敢て珍しくないものであるから、千頭一律に精密なる量を規定するのは誤りであり、又一定の標準を示すことも出来ないものである。飼主自身がそれ／＼の犬の食慾を見て決定するより他に良い方法はないのである。くはしく言へば、先づ適量と思ふだけ與へて見てその食ひ振りは如何、又その結果たるコンディションは如何にと觀察を遂ぐることに依つて適宜加減すべきである。

犬は決して過食せしめてはならぬが、食ひ終つても尙ほ食を求むるの情態が切であるならば、それは食量の不足を意味し、これに反して食器に何等かを残す場合には稍々多量なることを示すものである。これは言ふまでもなく合理的の食料を給したる場合のことである。

食器が空になることは不足を意味すると共に満足適量をも意味するものであることを知らねばならぬ。實に上手な飼ひ方の秘訣は健康な犬が常に何物をも残す機會を與へぬといふ所にある。健康な犬が食器に臨み他所見をするやうなら、その食器は速かに取り去るべきである。これは唯一食を失ふだけのことで、多分その結果はこれを償ふて餘りあるものであらう。大體に於て食慾は健康の指針である。適當に運動を課せられた犬が、平素通りの食物を攝らぬといふことは犬の體か、それとも食物かに不具合の所があると考へなければならぬ。

もし犬が食物を攝らざる場合には、直ちにその食物を取り去り次回の時刻迄は何物をも與へぬがよい。一寸した異狀より來たるものは多分次回には完全なる食慾を回復するであらう。更にこれを取り去り第三回の時刻に定食を與ふべきである。第三回の食物をも攝らざる場合には醫療を要するものと知らねばならぬ。抑も犬は人間と異なり、二十四時間乃至三十六時間は食物なくして左迄空腹を感じるものでなく、又それは天然が教ゆる犬の自然療法であるから、第三回目までは無暗に薬は勿論他の美食(牛乳又は卵等)などを與へない方がよいのだ。

多數の犬を飼ふ場所に於ては、食量を甲乙丙等に區分し、同一量の犬はまとめて同區域の犬房に

收容するを便利とする。さもなくば、各犬房に甲乙丙等の食量を標示して置き、これに相當する食餌を分配すべきであらう。この注意なくして多數の犬を飼ふものとすれば、或犬は満足するも或犬は過食し、或犬は不足を訴ふるものと見なければならぬ。

〔問78〕 一般食物の量は何によつて差異を生ずるか。

〔答〕 犬の個性は別として犬の種類、サイズ、年齢、健康状態、仕事の量、生活様式等によつて違ふ。就中犬の仕事と氣候の變化に對してはその折々加減してやらねばならぬ。又寒さに曝される犬舎は餘分の食量を要し、成長中の犬は成犬よりも、蕃殖用の犬は蕃殖に用ゐざるものよりも多くの蛋白質を要するものであることを忘れてはならぬ。(第九、第十、第十一章参照)

〔問79〕 食物の品質と量とは互に如何なる關係を有つか。

〔答〕 栄養分に富む食料は比較的少量でよい。この原則はマスタフを飼ふにも、トイ・テリアを飼ふにも同一である。言ひかへれば、大型犬だからとて粗大なる食物でよいと言ふわけではなく、又小型犬だからとて必ずしも美食がよいといふわけでもない。即ち凡ての犬種を通じて栄養分の凝集したる食物を適量に給することが、不適良なる食物を多給するよりも上策であるのだ。かくの如

くにして良き犬が出来上り、よく働き、又頑丈な立派な骨組と筋肉とをその子孫に傳へ得るものである。この理想からいへば混食は肉類三分の二、穀類三分の一の配合を最良とする。

二 飼ひ過ぎ

〔問80〕 飼ひ過ぎの害は。

〔答〕 飼ひ過ぎの害は飼ひ不足の害よりも大である。凡そ食物はその出費に相當する報酬を齎すものであるが、飼ひ過ぎの場合だけは全然この法則を裏切るものである。抑も身體に不相應なる栄養の過剰は、不良の食物と同様に消化器に重荷を負はしめ、その結果、諸器官や健康の調子に甚しき悪影響を及ぼすものである。過肥の犬は牝牡兩性とも生殖機能を害し、仕事に對する耐力が弱く又病氣に罹り易きものである。誤つてはならぬ。飼ひ過ぎの犬と良く飼はれてゐる犬とは違ふ。即ち犬を無暗に肥やすことは病氣を製造する方法！ 仔を産まなくする方法！ 弱い仔を作る方法！ であり、又仕事に耐えられなくする方法である。

澱粉質の物を澤山與へるのは、最も速かに過肥に陥らしむる方法である。之に反して、脂の少な

い肉類と充分なる運動を興ふることは一般に硬き筋肉を犬に興へ、生き／＼したるコンディションを得せしむる方法である。これを蕃殖用としても使役用としても最も適良なるコンディションの犬といふのである。但しこの最良のコンディションなるものは多分品評會犬としては衆愚の眼を喜ばしむることは少いであらう。何となれば、多くの品評會なるものは犬を観る所！ 観る爲に犬を陳列する所！ 観る爲に犬を選択せんとする所！ 肥胖の上衣を着せて犬の缺陷を隠さんとする所！ であるとも言へないことはないからだ。これは確かに品評會の副生的の弊害と言ふべきであらう。而も品評會で養はれたる觀賞眼が不知不識の間に過肥の犬を作らしむることが決して少くないやうである。我々はこの弊害を一掃せんことを大いに叫ばんとするものであるのだ。

三 飼ひ不足

〔問81〕 飼ひ不足の主なる原因。

〔答〕 (一)食物の不足(二)栄養分少なき食物(三)過勞(四)體質等々：食物の量の不足がその原因をなすことはいふまでもないが、栄養分殊に蛋白質の少い食物は、たとへその量は多くとも良好な

る肉附を得せしむるものでない。諺に言ふ……「胃は満ちてゐるが肉は餓えてゐる」といふのがこの事を指すのである。

運動の過度即ち過勞も慥かに一の原因を爲すものである。しかしながら、多くの場合蛋白質を豊富に給すれば、少々強き運動を課するとも尙良好なるコンディションを保ち得るものであるのだ。體質の關係は同一の食物を以て過肥に傾くことがあると共に瘠せ勝ちになることもある。故に犬によつて食物の加減を爲すことが必要であらう。

〔問82〕 飼ひ不足の害は。

〔答〕 (一)諸器官を完全に働かしむる力が足りない(二)元氣がない(三)成長不充分(四)不産に傾き且つ不健全な仔を産む等……(一)(二)に就いては説明の要はない。(三)の成長不充分といふことも何人も異議はなからう。しかし、不充分といふ言葉の中には、成長の速度が遅いといふ事も含んでゐる。「犬は成長の速度が遅くとも結局の所或一定の標準に到達すればそれでよいではないか。」と考へてゐる人が可なり少くないやうであるから、これに對して特に注意を喚起して置きたい。成長の旺盛期に成長の速度が遅ければ、體の各部の鈞合がとれなくなるものであるのだ。特に胴の發育が

不良となる。平肋にして長脚の犬は多くはこれより生まれたる可憐兒であることを忘れてはならぬ。

(四) 飼ひ不足のものは飼ひ過ぎのものに比すれば、多くの場合仔を産むものではあるが、その数が少なく且つ産仔は小さくて骨組が弱いことは免れない事實である。しかのみならず、犬としては分娩に要する力が足らず難産に陥り易く又乳の分泌が少いものである。元來出産當時の仔犬のコンディションなるものは受胎當時の両親のコンディションに平行することが最も多く、かくして弱き遺傳は薄弱なる仔を作り、遂に系統の退化を餘儀なくするものであるのだ。

〔問83〕 經濟的の飼ひ方とは。

〔答〕 合理的の食物を惜氣なく給することである。食物を切り詰めるといふことは、宛も犬の肉を削り、仔を奪ひ取ると同様であつて、結局何の利益も残らぬものである。假に四頭の犬を飼ふに恰度よい食物を以て六頭の犬を飼ふものとすれば、何の利益も擧らぬかも知れぬ。それは宛も四臺の機械でよい仕事に對して、六臺の機械を運轉するのと同様、到底生産は經費を償ふに足らないであらう。又犬は一度肉を失へば、これを取り返す爲めには比較的多大の努力と經費とを要するものであ

つて、不斷所要の肉附を支へて行くのに比ぶれば大なる費用が要る。噫！ 熟練なる飼養と蕃殖法に依つて數代を費して折角獲得せられたる貴き素質が、僅かに數ヶ月の飼ひ不足の爲に滅却せらるるものが決して少くないことを強く認識しなければならぬ。

第九章 種牝の飼ひ方

一 平素

〔問84〕 種牝は平素どんなコンディションを有たねばならぬか。

〔答〕 固い緊つた肉附でなくてはならぬ。肥えたものと瘠せたものとは共に蕃殖用としては價値が頗る乏しい。然るに或人は云ふ。「瘠せた牝犬は多産と多乳との特徴である。」と。これは皮膚の觀察に過ぎなければむしろ幸ひであらう。瘠せてゐるから強き仔を産み多くの乳を出すものではなくて、胎内で仔をよく養ひ、又乳をよく哺むことによつて自然瘠せて來るものであるのだ。抑も種牝の飼ひ方の狙ひ所は、母犬を肥やすといふことでなく、母犬の力を強くするといふことと、仔犬の

爲めに骨と筋肉とを速かに作らしむるといふ所にある。即ちこれは硬い緊つた肉附の牝犬でなくてはならぬことを意味する。これが爲めには多くの蛋白質とこれを同化せしむるだけの運動と管理とが大切である。扱て母犬が仔を養ふ爲の栄養分は母犬の血液から搾出せらるゝものであつて、而もその血液の量は蛋白質の量に比例するものである。換言すれば、母犬の硬き緊つた肉の中に仔犬の骨と筋肉とがそのまゝ含まれてゐるのだ。決して脂や水分の中には含まれてゐない。

〔問85〕 一旦過肥に陥つた牝犬は如何に取扱ふべきであるか。

〔答〕 充分瘠せて見えるまで體の脂肪を取らねばならぬ：然るに或程度迄（一般の牝犬としては恰度良いコンディション迄）引下げて中止する人が少くない。それでは却々内臓の脂肪は去れるものではないのだ。思ひ切つて一度瘠せさすべきである。中途半途に止めてしまふから何時まで経つても駄目である。これをその儘繼續することによつて牝犬は生れもつかぬ石女となつてしまふ。

この時藥の力に依らんとする人があるが多分無効を配つ外ないであらう。尙、これが實施上に關しては大なる注意を要するものがある。それは決して急に瘠せしめてはならぬといふのだ。

二 受 胎 後

〔問86〕 受胎後の牝犬のコンディションは。

〔答〕 妊娠中は稍々肥え氣味が良い：妊娠中は胎内の子供の爲めに栄養分を増給してやらねばならぬ。しかし、最初の一、二週間はさ程の負擔を持つものではないから、その頃より漸次栄養を増し稍肥えしむるのがよい。もしこの際過肥になるであらうことを餘りにも心配し過ぎて、栄養分を少くするならば母體を弱らしめ、且つ胎仔は生れ落ちる前既に消化器を害せらるゝものである。これを要するに平素良く飼はれてゐる牝犬にあつても、一層栄養を増すことに依つて少くも受胎前と同一のコンディションを保たしめねばならぬといふのである。序ながら、この時に於ける運動上の注意を述べれば、俄かに犬を引き止めること、引つ張ること、抑壓すること、跳躍せしむることは絶対に禁物であるが、概ね第四週ころまでは平素やり來たつた運動は何でも課するといふ方針が一番よい。爾後は漸次その運動の量を軽減すべきではある。その遞減の度合は分娩豫定日前概ね一週に至れば所謂排便運動にまで低下するやうに考へてやればよい。兎に角、規則正しき運動を缺いては過

肥に陥り、乳の分泌を悪くし、且つ健全なる元氣の仔を生ましむることが出来ないものである。

〔問87〕 妊娠中多くの肉食は。

〔答〕 仔の爲めに極めて好結果を與へるものである…これは Mr. H. Bury Knight の實驗に依る報告であるが、妊娠中の牝犬に對し殆んど全然牛肉のみを給することに依つて、より頑丈な仔を産み且つ分娩中の耐力を強くするものであると同氏は大いに推奨してゐる。

〔問88〕 妊娠間犬の食物に特に變化を與へるの可否。

〔答〕 可成變化を與へぬがよい…抑も妊娠中食物に變化を與ふることはよかれあしかれ、母體の消化器に何等かの變調を與へるものである。たとへ母體には何等の變調が見えぬ程度のもので、胎仔に對しては可なり大なる影響を與ふるものであることを知らねばならぬ。殊に下痢に傾き易き食物又は變質の虞れある食物は時に流産にさへも陥らしむることがあるから、大いに注意を要するであらう。

〔問89〕 妊娠中は磷酸石灰を特に補給せねばならぬか。

〔答〕 然り、特に補足するがよい…磷酸石灰は骨の基礎をなし、且つ筋肉組織中にも含まるべき

ものであるから、胎仔の成長に對し必要缺くべからざるものである。この成分をして缺乏なからしめんが爲め、受胎時より離乳時に至る間特に母犬にこれを補給するを安全とする。

Dr. D. I. Wall に従へば、磷酸石灰は母犬に與へなければならぬわけではないが、それは萬一の爲めである。元來充分な肉類と骨とを與ふれば、磷酸石灰の缺乏を來たすわけではない。しかしながら我々の畜犬は野生の犬よりも仔の数が多く又その成長率も急速なものである。然るに牝犬の消化器は別に大きくはなつてゐないから、兎角不足を告げ易き磷酸石灰は別に與ふるを得策とするわけである。

〔問90〕 母犬に與ふる磷酸石灰の標準量。

〔答〕 次の表の通り……

母犬——磷酸石灰給與標準表		受胎より第四週迄		第五週より離乳時迄	
犬の種類	犬	一日一回・茶匙	1/2 宛	一日二回・茶匙	1/2 宛
中型犬	同	同	1/2 宛	同	1/2 宛

小 型 犬	同	同	1/4宛	同	同	1/4宛
玩 具 犬	同	同	1/4宛	同	同	1/4宛
備 考	食物に添加して之を與ふ、特に脂肪分と共に與ふれば效能顯著なり					

三分娩前

〔問91〕 分娩直前の食物の量は。

〔答〕 一、二日の間食量を減ずるがよい…これは牝犬自然の要求であつて分娩に際して彼女が最大の力を發揮し得る所以である。のみならず、産れた許りの仔犬は左程多量の乳を必要としない。もし、分娩前一二日より分娩後一二日の間に餘り多くの食物を給するならば母乳の過剰を來たし、之が爲め母犬は自ら苦しまねばならぬ。否、甚しき場合には落命の悲惨に陥る事さへ敢て珍しくない。世の中にはこの事を注意しない人が可なり少なくないやうだ。ゆめ／＼注意を怠つてはならぬ。

〔問92〕 分娩直前起り易き便秘に關する處理法。

〔答〕 稍々緩き食物を給するがよい…蓋し便秘の原因は運動不足の結果と考ふべきである。或人は慣用手段として蓖麻子油の如き緩下劑を用ゆることもあるが、これは原則として可成避くべきことである。殊に腹の具合が如何であるかも考ふることなく、投薬せんとするが如きは甚しき無謀の處置といはねばならぬ。抑も犬の排泄物は健康上の指針であるから、特にこの際は注意して、これを檢すべきである。而も腹具合は食物の取捨と選擇とによつて容易に治さるゝものであつて濫に藥を待つべきものでないのだ。即ち粥や狐色に焼いたパンを多くして肉類を減ずることに依つても、又牛乳や野菜等の添加に依つても、容易に緩和の目的を達することが出来る。

四分娩時とその直後

〔問93〕 分娩の際投薬の是非。

〔答〕 輕卒に投薬することはいけない…特にお産が長びくときでも、熟練なる専門家の勸告にあらざる限り、興奮劑の如きでさへお斷りであると Mr. R. E. Nicholas は強調してゐる。同氏の實驗に依れば、此の際最も有效なる藥は滋養に富んだ消化し易き食物——例へば生卵を與へることが

世界中無上の妙薬であると。

序ながら、分娩の長引く原因に就いて述べて置きたい。

(一)過肥と運動不足 (二)外部から受けた故障 (三)分娩時の不安等が主なる原因であるであらう。これ等の原因は何れも飼主の注意に依つて或程度回避し得らるゝものである。就中犬に不安の觀念を興へぬ爲めには、可成不要の干渉を避けねばならぬ。水は手近に備へ付け、犬をして自由に飲ましむる如く仕向け、萬事滞りなく進んでゐるかどうかを監視してゐればそれで澤山である。お産があまり長引くときは生卵の一、二個を興へて見よ。それで萬事の解決は多くの場合附くものである。

〔問94〕 後産は食ふてもよいか。

〔答〕 後産は食ふても差支ない。否、生理的に食ふをよしとするものである。しかしながら、我々の畜犬は野生のものよりも多数の仔を産むを常とするから、甚しく多産の場合にその全部を食ふことは或は胃に過重を興へるものといふことが出来るが、これに就いてあまり神経をなやます程のものにならぬ。

〔問95〕 分娩の直後食事を興へるの是非。

〔答〕 第一安靜、第二輕き食事…これが我々の守るべき標語であるのだ。分娩後の疲労を恢復せしむる爲めには、何といつても安靜を興ふるに越したものはない。しかしながら、生卵の如き極めて消化し易きものを一口嘗めさすが如きは、犬の疲労少くして安靜を害することもなく、而も元氣の恢復には可なり大なる貢獻をなすものである。或は牝犬が産所から出て來るまでは何物をも興へぬがよいとの説を唱道してゐるが、このやり方は頑丈な牝犬にして、萬事都合よく進捗したる場合に限り採用すべきもので、一般に奨めるわけには行かぬ。

〔問96〕 分娩當時の過食の害。

〔答〕 母犬の體形を崩し、仔犬の消化器を害ふ…母犬は分娩に依つて俄かに腹が軽くなるので恰も空腹の感じを懐くものである。従つて多量の食事を給すれば案外過量を食ひ盡すものである。お産に依つて立派な牝犬の體形が崩れる事がありとすれば、それは主としてこの際の過食に原因するものと見て差支ない。しかのみならず、この過食なるものは仔犬の消化器を害し下痢を誘發し終に死に至らしむることも少くない。抑も分娩後一、二日の間は母犬の體内に貯蓄せられある養分を以つ

て仔を養ひ得ることが大自然の仕向であるのだ。此の際食物の少きは決して乳の不足を意味するものでない。消化し易き少量の食物、即ち生卵等を與ふればそれで澤山である。嚴に過食を戒めねばならぬ。殊に分娩當日は僅かな卵位で済ませ。

〔問97〕 仔が吸ひ付かざる乳房ある時は如何にすべきか。

〔答〕 乳汁を搾り棄てたる後、仔に吸はしめよ。時として一、二の乳房に限り仔犬が吸ひ付かざるものがある。如是乳房は多く變質したる乳を含むものであるから、先づその變質乳を搾り棄て、然る後仔犬をこれに誘ふべきである。これを捨て置くときは乳房の炎症又は腫脹の原因をなすものであることを忘れてはならぬ。

五 授 乳

〔問98〕 酸性過多の母乳は何に原因するか。

〔答〕 多分食物の不良が原因であらう。時々酸性過多の乳を出す母犬があるが、その原因は確實に判つてゐない。或人は犬それ自身の個性であると考へ、或人は食物の關係から來るものであると云ふ。Mr. R. E. Nicholas は自己の實驗を語つて曰く。脂肪少き健全の食物、即ち赤身の牛肉を以

て母犬を飼ふに未だ曾て酸性過多の乳を分泌したことに會はないと。いふまでもなく、酸性過多の乳を嘔めば仔犬の生命に關係するものである。

〔問99〕 母乳の分泌を増す方法。

〔答〕 根本的には消化し易き肉類を與ふるを最良とする。もし乳の分泌がよくないときは、濃いソップや汁氣のある食物を與ふれば効果のあるものであるが、凡そ乳房が完全に膨らんでゐるときは、此等の食物は多少に係らず與ふる事は好ましくない。元來乳の素は何であるかを考へて見よ。それは榮養に富む窒化物(蛋白質)であり、即ち肉である。而も乳には可なり多くの水分を要するが、これは食事外に於て適宜飲水することに依つてこれを攝り得るものであることを知らねばならぬ。汁氣多き食物を與ふるときは消化量を過重ならしめ且つ牝犬をして水を飲むの意思を少くするであらう。

〔問100〕 母犬の運動は乳の分泌を多くするものか。

〔答〕 然りと言ひたい。しかし、強き運動は乳の分泌を少なくする。元來乳の分泌といふことは母體に對しては運動と同じ仕事に相當するものであるのだ。この理を了解すれば、哺乳期の母犬に

は如何なる程度の運動を課すべきやがよく判るであらう。即ち自轉車に依る運動の如きは、それだけ乳の分泌を少なくすることとなる。仔供を育てる途中に於て母犬が疲勞を感じるやうでは、充分に仔を育てる方に母犬の力を用ひしむるわけには行かない。これに關して時々誤れる考へを持つ人もあるやうだが、我々は主に注意しなければならぬ。殊に運動後母體の過熱しあるときの母乳は仔犬を害することが極めて大である。

しかしながら、母犬をして新鮮なる空氣と日光との中で自由なる氣持を以て自ら運動せしむることとは母仔共に多大なる利益を受くることとなる。故に日の進むに従ひその時間を長くすべきである。

産後二十四時間を経れば、母犬の機嫌をとり輕き歩行に誘はねばならぬ。かくすることに依つて母犬の爲め恐るべき發熱を豫防し得るものである。

〔問101〕 母犬をして仔をよく育てしむる要件。

〔答〕 必要な興奮及環境の變化、恐怖不快の感、峻烈なる天候等に曝さぬこと…勿論榮養を良くすることが大切であるが、凡て心の平靜を破らしむることは著しく仔を育てる能力を減却せ

しむるものである。榮養良好なる母犬は自然に満足して善性であるが、而も他人、他犬等の近接、喧噪なること、急速なる運動や急に引つぱり廻はすこと、寒氣に顫へしむることなどは母犬としての能力を害するものである。故にこれ等のことに注意して迷惑をかけぬやうにすることが完全なる食物を一層完全にその仔の爲めに役立たしむるものであるのだ。

〔問102〕 哺乳仔に補食を與ふことは母犬に如何なる影響ありや。

〔答〕 母體を速かに回復せしめ、次の蕃殖を早め且つ長く蕃殖に耐えしむるものである…天然よりいへば、母犬は他の世話なくして仔を育て上げる能力を充分具へてゐるわけではあるが、犬が家畜として改良せられ、従つて多くの仔を産むやうになり又一年二回も蕃殖に用ゐられることゝなつた。しかのみならず、仔犬發育の速度も野生のものに比して遙かに速かである。故に仔犬に補食を與ふことなくして、これを母犬の乳に一任するならば、それは母犬の爲めには可なり大なる負擔と言はねばならぬ。

元來乳は母體の血液から出るものである。その血液はその都度補給せらるゝ食物と母體內に貯へられてゐる肉や脂から搾出せらるゝものである。實際に於て第二週の終りまでは差程の負擔もない

が、第三週に入ればぼつ／＼母犬は瘠せて来るものである。これを補ふ爲めには母犬に多量の食物を給しなければならぬ。然るに一方母犬の消化力には一定の限度があるからより多くの負擔には耐えない。故に母體を煩はさずして直接仔犬に榮養を與ふる方法が考へられたのである。この直接方法の爲めには幸ひにも牛乳なるものがある。蓋し牛乳は犬乳に比すれば仔犬の食物としては約三分の一の濃度しか持つてゐないが、その性質に於ては極めて類似してゐるものである。故に適宜これを濃くすることによつて充分その目的を達することが出来る。

これはいふまでもなく仔犬自身の爲めにも大なる救助であるが、母犬をして未だ衰退に陥らしめざる前、速かに恢復の途に向はしむることが出来る最良の方法であるのだ。

即ち第三週よりぼつ／＼牛乳を舐める方法を教え、日を追ふに従つて漸次その量を増すべきである。

〔問103〕 母犬をして哺乳の任に當らしめざるの利害。

〔答〕 直接の害は別としても、將來哺育の能力を失はしむ…立派な牝犬の持主はその犬を損せしめない爲めに、又品評會等に出陳する都合からして、牝犬を早く哺乳の任から引き離すことが

ある。これは天理に反るものであつて、直接母犬を苦しめるのみならず、將來の仔に對して哺乳の任を完全に盡さしむるの能力を減ずるものであるのだ。

多少なりとも離乳期を早むることも、右と同一の因果關係を生ずるものであるが、近來補食の道が大に進歩したので、生後第九週の離乳期は漸次短縮せられ第六週の終に於ても甚だしき影響なくして實施せらるゝこととなつた。それは犬の種類にもよることであるが完全なる補食が行き届いたときに限るであらう。而もこれは母犬の哺育能力を短縮せしむることの止むを得ざる結果に導くものである。

第十章 仔犬の飼ひ方

一通 說

〔問104〕 育成とは。

〔答〕 仔犬を育て上げることといふ…廣い意味に於ける蕃殖といふ言葉の中には或部分の育成と

いふことが含まれてゐるが、元來育成といふことは蕃殖と相並んで犬を作り上げる仕事に於て二大分野の一であらねばならぬ。犬を作り上げるに蕃殖法が重きか、將又育成法が重きかといふ事に就いては、いづれも輕重がないといふのが多分正しき答であらう。お話が一寸横道に這入るが、外國に於ては立派な犬の蕃殖者は自然育成者をも兼ねるを常道とするが、我國に於ては未だその域に達してゐない。即ち多くの蕃殖者は生後一ヶ月半か二ヶ月にしてそれ／＼分配し、育成の大部は第二者の手に委ぬるといふ傾きが大である。これは色々の事情が纏綿するからであつて、一面止むを得ないことと思ふが一考を煩はすの必要があらう。

今假に一頭の立派な犬が出来たとする。この場合その功なるものは果して何人に歸すべきものであるかを明かにする方法を採ることは強ち無駄ではないであらう。所謂蕃殖者なるものが離乳後引續き數ヶ月育て上げたものか、それとも他人の手に渡つて育て上げられたものか。それに就いてその功績なるものゝ歸する所に大なる差異がなくてはならぬ。前者の場合に於てはその功績なるものは全然蕃殖者に歸すべきものであるが、後者の場合に於てはその功績の一部は爾後の育成者に譲らなければならぬ。従つて蕃殖者獎勵の場合に於ても、この顧慮を必要とするものではなからうかと思

ふ。こんなことを茲に述べるわけは、離乳後の育成なるものが犬の出來榮に對して重要な役割を持つものであるといふことを強調するに過ぎない。

〔問105〕 完全なる育成への出發點は。

〔答〕 發端に於て頑丈なる仔犬を得るといふことである。仔犬は父と母とが頑健であるならば、成熟してゐるならば、よき筋肉と骨とを持つてゐるならば、健全なる體質と將來に向つて待望せらるゝ點に到達し得る機力とを持つて生れるものである。この機力なくしては完全なる育成が達せられないと共に、仔犬の飼ひ方が行届かなければ折角持つて生れた機力なるものも何處へか消え失せてしまふであらう。今一步具體的にいふならば、立派な種犬(唯名高い犬といふ意味でなく、立派な蕃殖状態にあることをも含む)から生れた仔犬が適當な食物を以て飼はるゝならば、極めて強く且つ極めて速かに成長するものであつて、これは成長後我々が待望する凡ての能力を充分に發揮するものであるのだ。仔犬のとき得たる力は成犬後の價値に何時迄も影響するものであつて、而も仔犬が一度變れたならば、爾後如何に手を盡すとも全部はこれを償ふことは出來ないものであることを強調したい。

〔問106〕 育成の爲の食物の要訣は。

〔答〕 蛋白質に富んだ食物を以て規則正しく飼ふことである…少量の礦物質の必要なることは別として、蛋白質の外のものでは建設の材料とはならぬものであることを我々は知つてゐる。澱粉質と脂肪質との過給は貧弱な骨格と貧弱な筋肉とを持つ犬を作るものである。「あまり大事に飼へば軟弱の犬になつてしまふ。」と心配する人があるが、榮養食と美食とを混同してはならぬ。實に蛋白質を多給して飼はれた仔犬は、他の食物を以て飼はれたものよりも色々の障礙に對してより強き抵抗力を持つものであることが實驗によつて證明せられた。良系統のよい仔犬を適當な食物を與へずして、その「強度」を驗さんとするものありとすれば、それは愚の至りであると言はねばならぬ。仔犬は弱きものなり、而も食物次第では強きものなり…勿論その他の管理法には多少の關係はあるが、食物がこの際最も大切な影響を與ふるものである…良い食物とは品質と量と回數の規則正しきことを意味する。

〔問107〕 育成間安心してゐてよい兆候は。

〔答〕 どし／＼成長するといふことである…大型犬を除き犬の育成目標は、決して標準サイズよりも大きな犬を作りたいといふのではないが、幼犬時代には出来るだけどし／＼成長せしめねばならぬ。かくすることによつて、その犬の持ち前だけの凡ての器管を最善に發達せしめ、最善の能力を附與せしめ得るものである。幼き時發育を鈍らしめた犬は爾後何等かの方法で成長を取り返し得るにしても、幼時どし／＼成長した犬に比較すれば、體形に於ても體質に於ても缺陷が多いことは免れない。かくして立派な血種からでも眞の駄犬が出来るのである。しかのみならず、幼時どし／＼發育せしむるといふことは、病氣その他の惡環境に曝らしても抵抗力が強いので全く安心である。不幸にして眞に病氣に襲はれてゐる幼犬が出来たら、止むを得ぬから惜氣なく棄て、しまひたい。

〔問108〕 犬の健康とその價值とは、犬の一生に於て何れの時期に最も多く附與せらるゝものであるか。

〔答〕 生後六ヶ月の間…殊に最初の三ヶ月である。この時期に於てどし／＼故障なく成長するか否かによつて一生の運命の大部は定まるものである。この期間には絶えず成長を續けるもので唯の一日でも停止するものではない。唯の一日でも停止するならば、それは單に一日の増量を無にするだけの意味でなく、後日に何等かの影響があるものであると思はねばならぬ。幼い時の成長が幾

分でも滯滞したものは、幼時よく育つたものと到底同一の成績を争ふわけには行かぬ。決して幼犬の肉を失はしめてはならぬ。もし我々がこの理をよく了解して終始滞りなく幼犬を成長せしめ得るならば、我々のケネルには「不運」てふ悪魔が見舞ふ隙がない。要するに生後六ヶ月迄の發育状態は彼が一生の價値を左右するものである。

〔問109〕 幼時どしどし成長せしむる爲め最も大切なる要素は。

〔答〕 肉食である。仔犬が良い食物で適當に飼はるゝならば、決して飼ひ過ぎや飼ひ不足になるものでない。又一日でも成長が停止するものではない。彼は頑丈な強い骨格となり、完全に發達して長命な犬となり、生産力が旺盛な犬となる。犬がもし無一物で成長するものとすれば犬は無價値のものであらう。幼犬を飼ふに費用を惜むものは「一文惜みの百失ひ」の譏を受けねばならぬ。こぢくれた仔犬は多くを食はないから、經濟的のやうに考へらるゝであらうが、それは結局大なる損失を意味する。成長中の仔犬は體の凡ゆる器官をして活潑なる發達を遂げしむる爲め、極めて豊富なる蛋白質を要求するものである。もし、この要求を充すだけの食物が與へられなければ、生命を司どる諸器官は小さくなり、骨は軟かく、場合によつては太鼓腹の重量さへ支えることが出來な

いまで弱くなるのである。要するに生後早期の發育は、最も安價に買はるゝ發育である。早期に拂はれる一個の銅貨は、後れて拂はるゝ數百の銀貨にも勝るものである。生後八ヶ月の未成犬の肩の高さを普通の場合よりも一センチだけより多く伸さんとするには極めて大なる費用と努力とを要すであらうが、四ヶ月のときには比較にならぬ程安き力と費用とを以てこれがやす／＼と得らるゝものであることを何人も合點するに難くない。換言すれば、離乳當時の仔犬に對する牛肉の一〇〇瓦は未成犬に對する牛肉の數萬瓦よりも大なる成績を擧げ得るものであることを了解しなければならぬ。是れ即ち幼時の成長は安價に買はるゝ成長であるといふ所以ゆゑものだ。

〔問110〕 優良系の仔犬は弱いか。

〔答〕 必ずしも弱いものではない。『優良系の仔犬は實際死亡率が高い』とは偽らざる告白であらう。されば、多くの人々によつて「これは高級蕃殖から來る不可解の變質に歸するものである」とさへ考へられてゐるやうだ。然るに實際を観察するに、此等の仔犬の多數のものは何の缺陷もなく、最初榮養もよく、適當なる食物を容易に消化し得るのであつた。彼等はこの世界に花々しきスタートを以て出て來たものであつた。而も彼等は間もなく夭死する——我々の優良系の仔犬は

健康と體質に於て神秘的に退化せられてゐるわけでもない。又生きながらへる爲めにあまりにも弱く生れて来たわけでもない。又彼等を飼ふ爲めに費用が節約せられたわけでもない。然らば、その理由は何點に存するか？ それは飼ひ方が合理的でないといふ外、何の理由をも見出すことが出来ない。忘れてはならぬ。高級犬の仔は高級の注意に依つて飼はねばならぬ。元來仔犬は他の多くの動物の犬と同じく驚くべき順應性と回復力を持つてゐるものである。不適當な飼ひ方で死んで行く仔犬といへども、多少なりとも成犬とならんとして苦闘するのであるが、何分にも飼ひ方（食物の質のみならず、汎い意味に於ける給餌萬般の方法）が悪いので、だん／＼衰へて行く。そして飼ひ方のよい仔犬が通れ得る病氣の爲めに終に屈伏せらるゝものであるのだ。食事外の他の管理——新鮮なる空氣、よき日光、乾燥——成長するにつれて運動法——等も勿論大切な役割を持つものであるが、それは多くの場合常識によつて都合よく仕向けらるゝものである。最も研究を要するものは給餌法のそれであらう。その給餌法とは品質と量と回数並に規則正しき實施を意味する。而も誤つた美。食や化學品乃至は藥物等の濫用は絶対に排斥しなければならぬ。このことは立派な仔犬を育てる場合動もすれば陥り易き通弊であるから何人も深く戒めねばならぬ。

二 寒氣の感及と豫防

〔問111〕 初生仔に對する寒氣の感及とその豫防法。

〔答〕 嚴寒には生れて間もなく死ぬものが少なくない。故に暖房装置を必要とする。嚴寒の際には生れると直ちに死ぬるものが少なくないのは、母親の胎内にあつては概ね華氏の10一度の體温で温められてゐるものが、俄かに寒き大氣の中に投げ出さるゝからである。彼等は顫へ、乳房を吸ふ力もない。冷えた仔犬は死んだ仔犬と同様であると思はねばならぬ。これが豫防法としては暖房装置を必要とする。これが現代の賢き育成法である。何人も異議なきに至つた。願るに、天然では動物は一年中最も都合のよい温暖の候に仔を産むものである。日増し暖くなつて行く春季に生れ出る仔犬は何と幸福なることよ。この事實は少くも寒い時には暖房装置を採用すべきであることを我々に教ゆるものであらう。寒い冬の最中に育つ仔犬は、寒氣に對する抵抗力が強く、順應性に富むものであることを證するわけではあるが、寒さに顫はすことが仔犬の發育をよくするものでなく、身體を丈夫にするものでもあり得ない。甚しき寒氣は折角仔犬が攝つた營養分を、體温の保持に消費

するから、成長の爲めに役立つ分はなくなる。成長に益する分まで攝らうとすれば、胃腸の障害を來たすことは判り易き道理であらねばならぬ。實に煖房装置は或意味に於て食物であり而も消化器を煩はさない安價な食物であるのだ。顛へる仔犬は成長するだけの餘裕がない。これが爲めには高價な煖房装置でなくてもよい。小さなストーヴ一個で物足りる。殊に本協會養成所の創意に係る装置法はその設備及び使用法に於て最も簡便なるものと思ふ。それすらも出來ないときは湯たんぽでもよい。唯注意すべきは煖房装置の爲めに空氣の汚穢なきことを嚴に戒めねばならぬ。否らざれば、仔犬の爲めに尙僕病等の原因を醸すこととなるであらう。

理想の煖房溫度は、出産後二日間は華氏八〇度、その後第十六週迄は同六〇度が適當であると R. E. Nicholas は實驗を語つてゐる。

三 哺乳

〔問112〕 初生仔は何時乳を吸ひ始めればよいか。

〔答〕 強い仔は生れ落ちると直ちに：母犬がよいコンディションであるならば、生れる仔も多分

元氣である。如斯仔犬は生れ落ちると間もなく乳房に吸ひ付くものである。こんな仔犬に限り一寸した不行届があつても容易に落命することは萬々ない。生れた當初最も大切なことは一時間以内に乳房に吸ひ付かしむるといふことと、寒さの爲めに顛へしめぬといふ二つである。度々乳房に附けてやらなければならぬ仔犬程、指で乳を搾つてやらなければ自分の力では充分吸ひ得ぬもの程、より弱いものであるのだ。

〔問113〕 初生仔には初乳が何故必要であるか。

〔答〕 初乳は一種獨特の性質——利通の性を持つてゐるからである：初乳とは初めて分泌せらるゝ乳汁をいふ。初生仔は母の胎内にあつて累積せられた老廢物を持つたまゝ生れて來るわけであるから、天然に利通性を持つ初乳に依つてこの老廢物を下してしまはなければならぬ。故にこの初乳を飲むことが出來なかつたものには、温い牛乳に入れたヒマシ油の一、二滴を與へるがよい。

〔問114〕 酸性過多の母乳は如何なる害があるか。

〔答〕 仔犬の生命を奪ふものである：生れ落ちた當座極めて元氣に乳を吸ふ健康な仔犬が四、五日の後次／＼にと斃れることがある。この原因の多くは母乳の酸性過多であるのだ。藍色リトマス

紙を以て母乳を検し、赤く變色するものは酸性過多の乳である。この乳は仔犬の生命を奪ふものであつて大に注意しなければならぬ。この場合に於ては仔犬は速かに母犬より取り去り、假母に附けるより目下の所善い方法がないやうだ。乳汁吸出器の應用や、重炭酸曹達を母犬に投薬することが有効であるといはれてゐるが、その效驗は極めて疑はしいものといはねばならぬ。これが最も善き豫防法は多分良好なる給餌であらう。(第九章(問98)参照)

〔問115〕 母犬の食物と哺乳仔の下痢は如何なる關係ありや。

〔答〕 哺乳仔の下痢の最も多くは母犬の食物に關係するものである。母犬には何の故障も現はれない程度の食物——例へば多くの野菜又は稍變質したる食物でも、仔犬には下痢を起さしむることがある。何となれば、これ等の食物は母犬の身體に對しては或程度迄中和せらるゝものであるが、仔犬に對してはその不適合成分が乳を通じて仔犬の胃腸に入り、彼れの繊細なる器官を犯すからである。その他母犬の過食、酸性過多乳、母體の過熱等は仔犬の下痢の原因をなすものである。(第九章(問96、97、98)参照)

〔問116〕 母犬が哺乳を嫌ふ原因。

〔答〕 (一)乳汁の不足 (二)乳房の炎症 (三)仔犬の爪搔き……(一)(二)に就いては言ふことを俟たぬ。(三)に就いては兎角注意を怠り勝であるから、油斷なく仔犬の爪先を検し、必要に應じて剪んでやらねばならぬ。殊に犬の種類によつては驚く程鋭敏なる爪を持つものがあることを忘れてはならぬ。

〔問117〕 哺乳間仔犬の補食は如何なる利益ありや。

〔答〕 母仔の榮養を完全にし、且つ離乳の準備を漸進せしむ。我々の畜犬は野生のものに比して一般に仔の数が多く、且つ仔犬の成長率が迅速であることを知つた。(第九章(問102)参照) 故に母乳だけでは仔犬には完全なる發育を遂げることが出来ない。これが例證として Tom McDonald は母仔一組のスコティッシュ・テリアの體重を計つて次の如き數字を掲げてゐる……

一、生後七週の哺乳仔一組 總體量三〇封度

一、右仔犬の母同 體量一四封度

この二つを比較して見るに、仔犬の總體量は母犬の體重よりも二倍以上である。加之これ等の仔犬は日々長足の發達を遂げなければならぬことを想へば、如何に補食なるものが肝要であるか、よ

く理解出来るであらう。

〔問118〕 補食は何時頃より始むべきか。

〔答〕 生後三週より始むべきである。實際を観察するには第二週迄は母犬の負擔も少なく母乳だけで澤山であるが、生後第三週ともならば、母犬のコンディションよりいふもぼつ／＼仔犬の爲めに補食の必要を感じるであらう。勿論この時期に於ける量は極めて少なくてよい。濃くせられた牛乳(第三章(問30)参照)を以てすれば、その標準は次の通りである。

生後三週仔犬の補食(濃厚牛乳)標準量		
犬の種類	一日の回数	一回の分量
トイ・ドッグの仔	一日五、六回	茶匙一杯
小型犬(フォックス・テリア)の仔	同 右	同 一杯半
中型犬(コリー)の仔	同 右	同 三杯
大型犬の仔	同 右	食匙一杯

牛乳の濃度を最初薄くして、週の進むに従ひ濃度を増すといふ説があるが、これは何等理由なきことと思ふ。最初より犬の乳と同一の濃度即ち牛乳の三倍濃くしたものをを用ゐねばならぬ。

〔問119〕 哺乳仔の補食には如何なる品質のものがよいか。

〔答〕 乳の類を最も適當とする。抑も哺乳動物はその肉食類であると草食類であると將又混食類であるとを問はず、哺乳期間は澱粉質のものを以ては完全に發育し得ないことを原則とする。大自然は凡ての哺乳動物の初生仔をば母の乳にて育つやうに作つたのである。而も母の乳なるものには澱粉質は少ない。故に後日全然澱粉質食料を以て生活し得る草食動物ですら、生れた當座のものは澱粉質のものを主食せしめたのでは失敗するわけである。況んや犬の仔に於ておや。

抑も肉食動物の消化組織は唯動物質のものだけを攝り得るやうに作られてゐる。肉食動物の産仔の体内には炭化物特に澱粉質は極めて微少なるパーセントしか含んでゐない。そして一生涯を通じて澱粉質を消化するには全然適してゐない。仔犬が好んで肉類を食ふの本性は、大自然が設計したる自然の要求から起るものであつて、何も仔犬の我儘から起る贅澤ではないのだ。澱粉質のものは哺乳期に在る仔犬が食ふ食物といふより、むしろ仔犬の腹を填めるに過ぎないものといはねばな

らぬ。而もこれはあまり健全なる填塞物といふわけには行かない。この見地よりすれば、何人といへども仔犬の補食として粥汁や米の粉乃至は葛粉を溶いたものを與へることの誤であることを容易に發見するであらう。而もこれ等の食物が外見上極めてよく牛乳に似てゐることは奇しき縁といはねばならぬ。

記憶せよ。牛乳は哺乳期の仔犬の補食として最も適良のものであるが、粥汁や葛湯は似て非なるものであることを。

〔問120〕 哺乳仔の補食として牛肉の價值。

〔答〕 時期が早過ぎては害あつて益がなす。Dr. A. J. Sewell に従へば、「生後四、五週の仔犬に屢々削いだ生牛肉を與へて見たが、その結果は良好である」と牛肉の補食を奨めてゐる。しかし、一般的にいへば、生後四週では時期稍早しと言はねばならぬ。いくら犬が肉食を好むからといつて本格的の哺乳期間（少くも五、六週と見做す）に肉を給することは果して合理的であるかないか大いに疑問とする所である。實際早期に於て牛肉を主なる補食とすれば、仔犬は多くの場合尙儂病に罹るものである——尙儂病の原因は色々あつて未だその原因もはつきりしてゐないが、榮養方面から

いへば石灰の不足といふことが一大原因のみに數へられてゐる。しかしながら、一方必要なる脂肪分の不足から來るものであることを忘れてはならない。牛乳には適良なる脂肪分が含まれてゐる。

大自然は仔犬が生後五、六週間を経過して母犬の吐き出す半消化の食物を攝るやうになるまでは、唯乳だけで發育するやうに仔犬を作つたものである。但し概ね生後五週に於ける仔犬に僅つばつ牛肉を與へ始めるといふことは離乳準備といふ意味よりして敢てわるくはないと思ふ。唯注意すべきは尙この時期に於ても補食としては牛乳を主とし、牛肉は眞に副であることを忘れてはならぬ。而も牛乳より牛肉に移る中間食品としては鶏卵や肉汁なるものを推奨したい。

〔問121〕 生後七週前後の仔犬に對する主なる補食には何が良いか。

〔答〕 生卵か肉汁が最も適してゐる。流動體たる乳より固形體たる肉に移らんとするこの時期の補食としては、兩者の中間に位する生卵か肉汁が最も貴重なる食品である事は毫も疑ふの餘地がない。蓋し生卵はその榮養濃度に於て概ね犬の乳と同じく、而も犬の爲めには消化最も容易なる特色を有つてゐる。又肉汁を與へることは漸次牛肉に馴らす爲めに良好なる手段であらねばならぬ。

四 離乳と離乳後の食物

〔問122〕 離乳は何故に急に行ふてはならぬか。

〔答〕 母仔共に甚しき害を受けるからである。仔犬は不意に食物の變化を來たし、これが爲め胃を害し充分なる榮養を攝ることが出來なくなる。これは單に消化器のみのことでなく、急劇なる離乳は精神的にも悪影響を與へ、頓に仔犬の發育を阻止するであらう。

抑も若き仔犬の育成に於て、離乳時何の影響をも與へなければ、その育成は半ば出來上つたといつても過言ではない。

又急劇なる離乳は母犬に對しても大なる苦痛を與へるものである。母體內に滯ふる乳汁は母犬に苦しき刺戟を與へ屢々炎症を起さしむるものである。よしや、直接母體に甚しき影響がないにしても、不意に分泌を阻止することは全泌乳器官の機能を衰退せしめ、次回の仔犬の爲めに乳の出を少くすることは確かである。

〔問123〕 急劇なる離乳を避ける爲めの手段。

〔答〕 仔犬をして漸次母犬に依頼せざるやう馴らす事と仔犬の全部を一度に取り去らぬこと……

第一の爲めの手段としては、仔犬に對して漸次補食の度を高むると共に、母犬より仔犬を離して置く時間を漸次長くすべきである。かくすることに依つて、仔犬は知らず識らずの間に獨立の傾向を強め得るのみならず、母犬の乳の分泌も漸次に減退し且つ母體のコンディションをしてあまり衰退に陥らしむることなくして速かに舊態に回復し得るものである。最後の時期即ち離乳の直前に於ては晝間は全然母犬を隔離し唯夜間だけ母犬を仔犬の許に歸してやることを推奨したい。又母犬を仔犬から遠ざからしむる手段として母犬だけ自由に上り得る高い臺を備へ付けてやることも一方法である。

それと同時に母犬に對する食物を漸次減じて常態に近づくならば、通常二週間の準備を以て母仔共に安全なる状態を以て離乳せしめ得るものである。乳の分泌を完全に止めんとするには汗氣の多い食物はよくない。

右の外、乳の分泌を安全に止める一法として、離乳に當り仔犬二頭だけを暫時残して置くことも有効であらう。かくすることによつて、概ね五、六日の後には母犬は何の故障もなく閉乳するもの

である。

〔問124〕 離乳後の仔犬の主食物としての牛乳の價值。

〔答〕 主食物としては適當な食物とはいへぬ。哺乳期間に於て固形體食物が不適當であるが如く離乳後に於ては液體食物は適當な主食といふことが出来ない。何となれば、營養の凝集したる食物を攝らねばならぬ、又攝り得るやうになつた仔犬に水氣の多い稀薄の食物を給するならば、その用を充たすわけに行かざるのみならず、自然胃腸をも害することになるからだ。たとへ濃くした牛乳を以てするも尙ほその容量が大であり、胃を害することなくしては迅速なる發達を遂げなければならぬ仔犬をして所要の營養分を攝らしむるわけに行かない。而もこの場合、仔犬を飲み易き牛乳の方を好み、その量を過すことに依つて固形體食物を嫌ふやうになるものである。かくして太鼓腹の脚の曲つた犬が出来るであらう。——弱き食物は弱き犬を作る。水氣多き食物は水氣の多き犬を作る——牛乳なるものは、哺乳間の最上無比の主要補食物であると共に、離乳後に於ける不適當なる主食物であることを強調しなければならぬ。仔犬をあまりにも大切にすべく多くの愛犬家が失敗する原因の一は、いつまでも牛乳を過信することに歸するであらう。再び言ひたい。仔犬が肉を食

ふやうになつてから肉に代へ得べき良いものは他に何物もないと。

〔問125〕 離乳後の仔犬の食事回数。

〔答〕 一日五、六回を適當とす。離乳前に於ては母犬は屢々仔犬に乳を哺むものであつた。度々補食するものであつた。實際仔犬の胃袋は一時に多量の食物を攝り得るやうに出来てゐない。それ故に短い間隔をおいて少量づゝ食物を與へねばならぬ。實驗の結果に依れば離乳直後は一日五、六回、生後四ヶ月には四回、五、六ヶ月となれば三回、七、八ヶ月に於て二回といふ見當が適當である。勿論犬の種類に依つて多少の差異がある。而して最初のもものは早朝で、最後のものは夜である。最も大切なことは夜、空腹の儘寢床に行かじめぬといふことである。

幼犬飼育の秘訣は一度に澤山與へずして而も一日には豊富に與へることである。幼犬が熱心を以て食ひ得る量を與へよ。食器の中に一粒でも残してはならぬ。幼犬が食器から口を離して他所を見するならば、直ちにその食器を取り去れ。

〔問126〕 食事を監視するわけは。

〔答〕 (一)食ひ振りを見る爲め (二)爭奪を防ぐ爲め (一)食ひ振りを見ることは食物の質と量

との適否を知り、仔犬の健康状態を見分けるに最もよい機会である。良き飼主は自己の手から食物を與へる。實に飼主の手から食事を受け得る仔犬は最も幸福なる犬であると信ずる。

(二) 訓練せられたる成犬は他の犬の食器を窺ふものでないが、強き仔犬は弱き仔犬の食物を奪ふものである。かくの如くでは仔犬は常に食物の過不足を來し、落ち付いて食事することが出來ず弱きものは食ひ残しの他、何物をも得ることが出來ないであらう。これが爲めには別々に食事せしむることを推奨したい。

〔問127〕 仔犬の食物は朝夕その量を異にすべきか。

〔答〕 毎回平等にするがよい。成犬にあつては多分朝夕その量を異にするであらうが、幼犬にあつてはその差を附ける餘裕を持たぬのみならず、一度は多く一度は少くすることは、仔犬の消化器を害するものである。或時は多く或時は少く與へ、或時は食事時刻を延ばして一向顧みない飼主はたとへ高價な食料を用ゆるともよき成長を買ひ得る人でない。我々は同等の價を以てより以上良好なる成長を買はねばならぬ。これが爲めの秘訣は規則正しくするといふより外に最もよい方法を見出すことが出來ない。

〔問128〕 仔犬の食物の温度は。

〔答〕 熱いものは害があり、冷いものは損である。熱いものがよくないことは成犬と同様である。而もあまり冷きものは小さな幼犬の爲めには損失であらねばならぬ。何となれば、體の血液と同一温度に冷き食物を温めることは、かよわき幼犬をしてあまりにも大なるエネルギーを浪費せしむるものであるからだ。これが爲めには華氏一〇〇度の温食が最も適當である。

〔問129〕 幼犬の下痢とその療法。

〔答〕 主として食物の不良と急變、それに濕つた寢床等。赤身の牛肉で飼ふときは、殆んど下痢を起すことはない。しかしながら、色々の食物を給することに依つて仔犬は下痢に罹り易きものである。小さな仔犬の消化器は繊細なるものであるから、勿論少しでも變敗の傾あるものを與へてはならぬ。洗ひ方不完全なる食器でさへも下痢の誘引をなすものであることを忘れたくない。

食物に亞いでは乾燥であるが、これは下痢の豫防と治療とに大切なる要件である。下痢にかゝつた幼犬には薬は可成用ゐないがよい。乾いた寢床に靜かに休まして置けば、多分癒るものである。多く靜かに休めば休む程回復が速かである。運動さすことがよくないばかりか、心配の餘り仔犬を起

して見ることさへもよくないのである。病氣が平癒すれば幼犬は獨りでに飛び歩くものであるから、それまで待たねばならぬ。

下痢したる不潔物を犬舎の中に打ちやつて置いては空気を汚し、病勢を強めるであらう。尙この際赤身の生肉は下痢止めの良薬であるが、もし下痢が甚しきときは一度蓖麻子油の少量を與へ、腸内を掃除して然る後養生に努むるがよい。

輕き下痢は仔犬にはあり勝ちのもので大なる心配とはならぬが、心配すべきものはむしろ便秘であるであらう。これは速かに治さねば大なる手遅れとなるであらう。これに對しては少量の野菜が適當の薬である。一般に藥品は幼犬に對しては濫に用ゐるはならぬ。

〔問130〕 被毛の發達は何に關係するか。

〔答〕 肉食に負ふ所が極めて大である。抑も被毛の發達並に更新なるものは犬の爲めに大なる負擔である。殊にワイア毛種及長毛種に於て然りとす。幼犬は漸次成長するに従ひ被毛の更新をなすものであるから、これに費さるゝエネルギーは決して輕視してはならぬ。元來被毛の發達なるものはその地の氣候風土にも關係するものであらうが、むしろ食物の關係に最も多く支配せらるゝもの

であることを吾人は信じて疑はない。我國は濕氣が多いから、ワイアヘアは何時の間にやら退化してしまふと悲觀する人もあれど、今一度食物の品質に就いて調べて見たい。兎に角、被毛は蛋白質でなくては全然出来ないものであり、而もその蛋白質なるものは體内に充分攝取せらるゝ場合でなくては、被毛の端末までは肥料が廻りかねるものであるのだ。被毛の退化はそれが遺傳であるにしても、一代で出來たにしても肉食の少き一證左であらねばならぬ。故に幼犬の成長期に於ては最も注意を拂ふべきであらう。

〔問131〕 土、石等の異物を食ふ原因とその矯正法。

〔答〕 原因は體內寄生蟲、消化不良、肉食不足。體內寄生蟲がその原因であることは一般に承認せられてゐるが、その他にも色々の原因があるであらう。Mr. R. E. Nicholas に従へば、消化不良、肉食の不足、手持ち無沙汰等もその原因をなすことがあると。凡そ胃の中の巡行が變化することによつて、腹が空く感じの起るものであるから、胃腸に異状ある仔犬はそれが消化すると消化しないに係はらず、空腹の感じを呼び起さしめんが爲めに、又手持ち無沙汰も手近にある土や小石などを嘔み下すものと見ることが出来る。最も平衡のとれた食物、肉類を多給することに

よつて、多分豫防と矯正が出来るであらう。

〔問132〕 何故糞類を食ふか。

〔答〕 肉食の不足も確かにその一原因であらう。Mr. R. E. Nicholas の實驗に従へば、充分なる肉食を給することに依つて犬は馬糞なぞに近寄るものでないと。然り、馬糞等の中には多くの動物質のものを含んでゐるから、これは或程度の眞理を語るものと思ふ。我々の經驗も亦これを裏書するものである。

〔問133〕 小型犬の仔の飼ひ方。

〔答〕 栄養の凝つた食物は有程度これを節したい。一般にトリー・ドッグは小さなものほどよいとせられてゐる。これが爲めには遺傳の法則に依つて小さくすべきであるが、或程度迄食物の加減によらなければならぬ。即ち栄養の凝つた食物は殊に節すべきである。しかしながら、極端に栄養を切りつめる方法は、大なり小なり犬の健康を犠牲にするものであることは言ふを須たぬ。健康を犠牲にしてサイズを縮小せんとするが如きは人道上筆にすべきことではないが、肉食を節し且つ肉類を以てあまり長く飼はぬことに依つて、或程度迄サイズを小さく仕立てることが出来る。眞に小

さな犬を作るには、數世代の間健康を害しない範圍に於て食物の加減をなし、自然變易を作り、又遺傳の法則に則つて淘汰宜しきを得ることに依らなければならぬ。一代にしてサイズを小さくせんと焦慮する人は不健全なる可憐の犬を作る人である。

〔問134〕 大型犬の仔の飼ひ方。

〔答〕 哺乳期を長くし、最も凝集したる栄養食を給すべきである。根本的にいへば、交配時母親のコンディションを最もよくして置くことに始まり、妊娠中より哺乳期間に亘り特に母犬に蛋白質の供給を豊富にしなければならぬが、仔犬がこの世に生れてからは、第一母犬に附ける仔の數を少くし、第二哺乳期をより長くし、第三完全にして規則正しき補食を給し、第四離乳後は可成容量小にして可成蛋白質に富む食物、例へば赤身の牛肉を豊富に與へることである。

目下の所、右の四方法より他に良法が発見せられてゐない。特に出發の當初に於て成長率を高めるといふことが、將來の成績に極めて大なる影響を有つものであることを忘れてはならぬ。しかしながら、大型犬の仔といつても初めから成犬の如く大きくはない筈であるから、無暗に急いではならぬ。「ゆつくりとそしてしつかり」といふことはやはりこの場合に守らなければならぬモットー

である。實に一年半を通じて毎日何程かの成長を繼續するならば、一年の半、肉に餓えて育つた犬よりも大なるサイズに到達することは見易き理であるであらう。

大なる大型犬を作らんが爲めに、唯母親の大なるものを選びば萬事終れりと考へる人は、多分大なるサイズの犬を見ることが出来ない人である。

× × ×
以上の問答より歸納して我々は我々の中型犬のサイズを自由に規正することが出来るわけである。

第十一章 種牡犬の飼ひ方

〔問135〕 種牡は如何なるコンディションをよしとするか。

〔答〕 潑刺たる精氣に満ち而も一見肥えてゐないこと…これは却々困難なる要求であるが、これが爲めには食物を減するのではなくて、運動に依つて調節すべきである。

食物の品種としては可成濃粉質又は脂肪質の過給を戒め、蛋白質に富んだる適良の品を用ひなけ

ればならぬ。もし、あまりにも肥え過ぐるときは犬が鈍重緩漫となり、確實に種を得ることすらも出来ないのである。實に運動の不足と肥胖に傾く食物とは、種牡をして性の無精に陥らしめ、將來の用を漸次に衰損し、長く種牡としての任に耐えざるに至らしむるものである。

尙注意すべきは、比較的多く使用せらるゝ時期、所謂蕃殖期に於ては、一層充分なる滋養食を多給し肉附の少ない觀あるよりむしろ肉附の良いといふ觀を呈せしめたい。

〔問136〕 種牡犬に對する食物の要訣

〔答〕 是非共蛋白質に富む肉食を主としなければならぬ…注意しなければならぬことは、平素として澱粉質を以て調ふた犬に、蕃殖期だけ肉食を多給するも、蕃殖の目的の爲めには何等物質的の附け加へをなし難いものであることだ。故に種牡を飼ふには平素より、殊にその育成期に於て決して食物をけち／＼してはならぬ。三分の一の餘分の支出は多分三倍の利益となつて報わらるゝであらう。種牡に對しては完備せる食物を給すると共に、運動の仕向け方、その他一般犬舎管理に至る迄第一等の取扱をなさねばならぬ。これは種犬所有者の人道責任ある義務であるのだ。従つて他の用途の犬よりも最も多くの費用と手数とを要するものであることを記憶せねばならぬ。

牝犬の所有者が種牡を選択するに當つて注意しなければならぬことは、目差す種牡が如何に飼はれてゐるかといふことである。たとへ良い血統の犬であつても、又良體形の犬であるにしてもブリーディング、コンディションが良好でなくては到底良好なる遺傳を得るわけには行かない。即ちよいコンディションにある種牡でなくては、良い仔を生ましむるものでないのだ。

従來我國に於て立派な種牡を輸入しながら、原産國に於ける當時よりも比較的良い仔を種付けけることの出来ない原因の一是慥かにその飼ひ方にあるものと思はれる。再び言ふ、良いコンディションとは所謂ショウ・コンディションの良いといふ意味でなくて、ブリーディングのコンディションの良いことを意味するものである。換言すれば、見る爲めのコンディションでなくて、蕃殖の爲めのコンディションをいふのである。全然脂肪のない石のやうに硬い感じのする體。試に肋部の皮膚を握れば掌一杯に容易に攪むことが出来、これを放てば直ちに舊態に彈き歸へる如きものをいふのである。

第十二章 食物と健康

〔問137〕 食物の適否は健康に如何に影響するか。

〔答〕 良い食物は抗病力を強くするものである。蓋し食物は常に身體を構築し、生活機能を働かすのみならず、その適否は病氣に罹り易くもし又病氣に罹らぬやうにもするのである。

栄養分から得た元氣なコンディションは恐らく病氣に對するに最上の藥であらう。實に良い食物は病弱な素質を持つもので、病氣に犯されぬやうその組織を改變することが少なくない。それと同時に貧弱な食物では可なり強い身體でも病弱に陥らしむるものであるのだ。原因なき所に結果は生ぜぬ——もしも何か故障が生じたならば、速かにその管理法、特に食物に關してその原因を探究し、先づ第一にそれを取り除かねばならぬ。ディステンパーの如き傳染病は最も良い食物と最も理想の管理が與へられてゐるにしても絶対にこれを豫防するわけには行かないが、それでも或程度まではこれに抵抗する力を増すことが出来得るものであると確信する。

〔問138〕 食物は遺傳素質にまで影響を及ぼすものか。

〔答〕 然り、遺傳の素質をも改變するものである。主として犬を澱粉質食物で飼ふならば、唯一代だけでも犬を小さくし、犬を弱くし、犬を肥え過ぎに陥らしむるものである。

澱粉質の過給によつて執拗に弱められた兩親は、自己と同様の體質を持つ仔を生むものである。

不適當な食程、遺傳の素質を打ち壊はすものは多分他にはない筈である。犬が主人の爲めに勞働や精神力を惜むやうになる裏面の原因は食物の不適當に存することが少なくない。かくなつた犬は最早蕃殖上寸毫の價値なきものであるのだ。

〔問139〕 食物と藥物との關係。

〔答〕 藥物は食物の代用とはならぬ：兎角大切にせらるゝ犬は、一寸胃腸に障害の兆候が現はるゝや直ちに藥を服まざるゝやうである。

抑も藥に依りて注ぎ込まれた生命や健康といふものは、良い食物に依りて得らるゝものに比較すれば實に月髓の差異があるのである。あまり必要もないのに、藥を使用することは藥なくしては、やり切れない迄に一層藥を用ゐたくなるものであり、だんぐその度を進むれば結局身體の調子を打ちこわしてしまふであらう。この誤つた親切によつて不幸にも損せらるゝ犬が決して少なくない。殊に優良系の仔犬、大切にせらるゝ仔犬が藥の爲めに生命を奪はれ、乃至發育不全となるものが少なくないであらう。見方によつては、優良系の仔犬の弱いのは一面藥の濫用といつてもよい。記憶せよ！藥は決して食物の代用とはならぬ。藥は犬の身體を建築する材料ではないことを。

〔問140〕 何故保健の爲めに藥を與へてはならぬか。

〔答〕 諸器官の機能を不調に陥らしむるからである：元來健康な犬に與へる藥はない筈である。

健康な犬に或病氣を治す藥を與へるといふことは、決してその病氣に對する豫防とはならぬ。それはむしろ諸器官の正常なる活動を不調に陥らしめ、身體の組織を弱めるものであるのだ。換言すれば、その結果は知らず識らずの間に犬をして病氣に罹り易き状態に導くものである。

元來最も良い食物は最も良い藥であるのだ。生肉の中には犬に必要な成分は多分に含まれて居り、牛肉は保健の爲めに凡ゆる藥品を壓倒するものであることを強記しなければならぬ。合理的の天然食品が與へらるゝ場合には最も良い化學的食品でさへも不要である事を強調したい。況して藥品に於ておや。

化學的製品で犬を飼はんとする人は化學的に犬が作らるゝ迄待たねばならぬ。近き過去はいざ知らず、今や藥の時代は過ぎ、良い食物と合理的の衛生法によつて病氣を屈伏せしむる時代に歸つた。それは賢き人々が既に誤つた迷夢から醒めた見識であるのだ。苟くも優良系の仔犬を飼はんとする人々は、これまで持つてゐた多くの藥瓶を犬舎より遠ざけて欲しい。同時に化學的食品をも決して

過信してはならぬ。

〔問141〕 病氣の豫防と治療とは何れが大切か。

〔答〕 豫防は積極的であつて、治療は消極的である。凡ゆる病氣の最良の手當はこれを豫防するといふことにある。畢竟我々犬を飼ふ者は醫療を待つよりも、犬の日々の要求を研究し病源を撲滅する方が賢い。悪くなつたものを後から盛り立てることは甚大なる努力を要するのみならず、度々病氣に見舞はるときは、たとへそれが輕易なものであるにせよ、衰へたるコンディションはその儘持前の體質となつてしまひ、終生健康でふ春日に浴することが出来なくなる。我々の經驗に徴するに、合理的の飼ひ方によれば十中の九までは病犬を出さずに済むものである。

第十三章 病犬に對する給餌

〔問142〕 薬と看護とはいづれが先か。

〔答〕 看護が先で薬は後である。多くの場合に於て病氣の初期に方つて適當なる看護（病體に食物、温暖と乾燥、新鮮なる空氣、氣持よき寢床に安靜）を施せば、一、二日にして快方に向ふもの

である。

藥局に走るより看護を先にせよ。殊に何とかして食物を攝らしむることに努力せよ。或場合に於ては薬は必要缺くべからざるものであるが、多くの場合に於て薬は看護に對する補助を意味するであらう。就中食物の與へ方が最も大切であることを忘れてはならぬ。何となれば、病犬の生命線は健康なる犬と同様、正しき榮養を攝ることに存するものであるからだ。換言すれば、良き食物によりてのみ衰へたる組織を回復し、體力を修復する材料を攝り得らるゝものであつて、薬は毫も榮養を供給するものでなく常に整調と興奮の作用を助けるのみである。

最も多くの病氣に於いて、漸次病勢は募るものである。而も天然はこれを醫する力を附與するものである。この二ツの相反する力が互に争闘してゐる間、この病勢に耐え得る力を盛り立て、行けば病氣の峠を越すこととなる。この仕事の材源は何か……即ち食物であつて薬は加勢の役割をなすものである。

〔問143〕 病犬の食物には如何なるものを如何に與ふればよいか。

〔答〕 大體に於て（一）犬が食欲あるときは生肉（二）然らざる場合又は發熱、消化不良のと

きは生卵か肉汁がよい……(一)犬が尙食慾を持つときは可なり栄養の凝つた食物を少量づゝ數次に與ふべきである。多くの場合病犬は他の食物を拒むときでも、生の挽き肉かそれとも薄くそいだ生肉は食ふものである。犬が食ふならばこれを與へて毫も差支へない。むしろ、これを差控へるのは誤であるであらう。薄くそいだ生肉は、犬の爲めには最も消化し易き、滋養のある、最も耐久力を強めるものであるのだ。故に最も多くの病犬に之を用ひ、犬を安靜に睡らしむれば病勢は漸次薄らぐものである。

(二) 發熱のとき、消化器を害しあるとき、又は食を拒むときは生卵の白味か肉汁(レモンしぼりにて搾る)は犬に攝らしめ易く且つ有效なものである。

牛乳は病犬の食物としては充分なる栄養を攝らしむる爲めにはあまりにも薄きに過ぎ、且つ案外消化の遅きものである。

鶏の肉殊にさゝ身はこれ亦犬には案外消化がよくない。ディステンパーの病後、雛の肉を賞用する人があるが、それよりも牛肉の方が勝つてゐると Dr. A. J. Sewell は試験の結果に就て語つてゐる。

食慾のなきときは如何にすべきか。このときは無理やりにも食物を與へねばならぬ。即ち薬を服ませるつもりで流動食を口から注ぎ込むべきである。しかしその一回の量は少しづゝにして回数を多くせよ。この時は人爲的に消化を助ける爲めに毎食ベプミンを混入するがよ」と Mr. D. L. W. III は云ふ。

尙病犬といふものは往々にして珍奇な物を食ふことが少くない。甚しきは平素は食はないものでも病氣のときは案外食ふことがある。例へば平素は兎の肉や鶏肉は生のまゝでは食はないが、病氣にて何も食はない時、これを食ふ如きである。生の肉は食はないが煮たものは食ひ、牛肉は食はないが魚肉は食ふ等常識にては一寸考へられないものに對して食慾を見出すことが決して少なくない。これ故に一二の食物に對して食慾なき場合に於ても、決してこれを見限ることなく品を變へ、調理方をかへ試みるのが一の要訣である。

又偶々これ等の變な食物を攝ることに依りて、將に死に陥らんとしてゐる犬が頓に元氣付き恢復に向つた例は尠くない。

病犬の食物の變化とその效力とは想像以上であることを記憶したい。

尙病犬は運動不足の爲め、とかく便秘に陥り易きものであるから、これに注意を怠らず食物の調和を計らねばならぬ。

〔問144〕 素人の投薬の是非。

〔答〕 素人の投薬は警めたい：元來薬といふものは専門的の用法に待つべきものであつて、決して盲目的に使用すべきものではない。軽い薬と思つても、病犬はこの薬と闘ふ爲に多少なりとも力を費すわけである。況んや偶々與へたる薬が適合しない場合には、病犬の身體の調子を狂はすことは想像の限りでない。この理由を明かに了解するならば、一服のアスピリンでさへ輕卒に與へるわけには行かぬ。

抑も病犬の體は薬の適否を暗探する器械では決してない。苟も薬を與へんとするならば、熟練なる専門家の治療方針に待つべきである。もしその機會を得ることが出来なければ、むしろ、完全にして親切なる看護によつて大自然の治療に委するのが遙かに賢明であると思ふ。病氣の回復といふことは犬體をして病苦に堪え勝たしめ、これを支持して危険期を通り越さしむることであるのだ。これが爲めには看護が第一、薬は第二手段といひたい。但し瀕死の犬を一服の薬で救ひ、一本の注射で

蘇生せしめ得るものであることを毫も否認するわけではない。要は素人療法は警めねばならぬといふのである。

結 言

以上百四十四問答を以て一先筆を擱くこととする。筆を擱くに當つて今一度筆者の信條を確かめて置きたい。

- 一、犬は食次第、元氣な良い仔の父となる。
- 二、犬は食次第、お産が軽くて、多くの強い仔の母となる。
- 三、犬は食次第、よく働く立派な犬と成る。
- 四、犬は食次第、病氣に屈撓せぬ。薬は次の次。
- 五、犬は食次第、長く役に立ち、その長壽を完ふする。

勿論これは食事だけに依頼するわけには行かないが、血種上の遺傳を除き一般環境の力の中で、食事が最も重要な位置を占めるものであることを強調するものである。

而もこの重要な問題を以上雑駁なる問答に依つてかたづけんとするは聊か大膽であるかと思ふが犬の給餌に關する根本的要件に關し多少なりとも資する所あらば筆者の満足はこれに過ぎない。

さは去りながら、茲に説く所の細部に關しては人々によつて多少の意見を異にする所もあり、必ずしも千遍一律の方法手段を何人にも強ひんとするものではないが、本答案の立て前としてそれぞれ由つて來るべき理由が明記してあるから、讀者はその理由の存する所をよく翫味して、取捨宜しきを得られんことを切に希望して止まない。殊に筆者の主唱する肉食なるものは必ずしも贅澤なる美食を意味するものでなく、多くの場合牛や豚の臟物や骨乃至は魚類の殘物でさへ事足るものであることを記憶していただきたい。

書を読んで悉く信すれば書なきに若かずと。さらばといつて、上すべりに讀んで何等實行に移さないものは更に愚の至といはねばならぬ。蓋し本問答は唯單に一片の理窟から割出したものでなく、多くの實驗から得た貴き歸納であるからだ。冀くは讀者各位これを諒とせられよ。

補足編

前編「問答」に書き落した所を拾つて補ふつもりであるが、後からの思付であるから筆先に多少の重複を來たすかも知れぬ。希くは蛇足に終らなければ幸い。

(一) 手段方法の選擇

前編で書いた事は見方に依つては一の手段方法とでもいふべきものである。従つて他にも色々といふ方法があるであらう。しかしながら、注意すべきは、或人がこんな食物でこんな立派な成績を擧げてゐるからといつて、盲目減法にそれに倣はんとするものありとすればそれは愚なことである、といふこと。

抑も經驗から割り出した事物は誠に貴いものではあるが、それには相當の理由が明かに附せられてゐなければ應用の價値が寔に尠い。殊にその經驗なるものが薄べらなる場合に於て一層の注意を要するであらう。いづれにしても無批判の盲従ではいけない。

こゝにいふ批判とは何であるか？ それは食餌以外の色々の条件をも併せ考へることを意味するのだ。

色々の条件とは？

(一) 犬それ自體の特質

(二) 運動の量

(三) その他の環境

これ等のことを彼是考へ合せた上で、その採否を決定すべきである。

次に項を逐ふてこれに就いて若干の所見を述べやう。

(一) 犬の個性と食餌

犬それ自體の特質とはその遺傳の素質乃至は後天的に受けた精神状態及び體質等をいふのである。

(5) 神経系の榮養に及ぼす感作

精神状態に於ては犬によつて神經過敏のもの、良好なる悍威を有するもの、これに反して極めて鈍重なもの等々色々である。

神経の過敏なる犬は運動時間外に於ては居常比較的多くのエネルギーを消耗する。殊に新しき境遇に移さるとき、又は四圍の喧噪なるとき然りとす。今假に訓練場に預けられた犬に就いてこれを驗するに、神經過敏の犬はだん／＼瘦せて来る。こんな犬に對しては食物の量に於ても將又その質に於ても特別の注意を拂はねばならぬ。即ち量に於ては適宜これを増し、質に於ては脂肪や澱粉質のものを比較的多く與ふるを要せん。

尙神経系が食事に及ぼす關係を學理的に説明して見やう。

抑も體内に攝取したる榮養物に大なる關係を有つ神経系は何であるか？

學者はこれを名づけて植物神経系と言ふ。植物神経系の中で交感神経の方は體内物質の分解破壊につとめ、副交感神経の方は反對に物質の合成蓄積を司どる。故にもしこの兩種神経の緊張の度合がバランスを失ふときは犬は肥えることもあり、又反對に瘦せることもある。こんなむづかしいことは専門家でない我々にはよく分らないにしても、次の例示によつて概ねその理を了解することが出来るであらう。

能く眠る仔犬はよく成長する。能く眠る犬はよく肥えるものである、といふことは何人も否むも

のではない。これは睡眠間は交感神経の方は眠り、副交感神経の方は目醒めて働いてゐるからであるのだ。

喧噪騒擾が動物の成長に大なる悪影響を與へるといふ試験は既に數年前研究が遂げられた。これは交感神経の方が副交感神経の働き振りよりも強いからである。

我々は可成喧噪なる場所を避け静かな所で仔犬を育てたい——殊に食後は充分眠らしてやりたい。

(ろ) 内分泌腺と肥瘦の關係

體質に於て肥え型があり、又瘦せ型があるといふが、その根本に於ては前に陳べた神経の機能に關係するものであらう。然而して、神経系の機能に大なる影響を與へるものは實に内分泌ホルモンの働きであるといはれてゐる。内分泌の臓器には色々あるのであるが、その中で最も大なる關係を有つものは甲状腺そのものであるのだ。

甲状腺の機能が亢進すれば神経過敏となり、反對にその機能が減退すれば犬は鈍感的となるのみならず體重も重くなる。

甲状腺の次に、身體の肥瘦に可なり大なる關係を有つものは生殖腺のそれである。

生殖腺の機能が減退すれば全身肥胖となる。このことは我々人類の間に於ては何人も多く實見する所である。

これ等内分泌の不調に對する臓器療法なるものもあるであらうが、犬に於ては未だその効果の確實なるものを聞かぬ。

然り而して、ビタミンAなるものはこれ等ホルモンの分泌をして整調ならしむ上に大切なる役割を持つものであることは喋々を要せぬ。

(三) 運動の量と食餌

食物の量は運動の量に正比して増減すべきものであることはよく分つてゐる。然るに實際に於て食物の量は秤を以て量ることが出来るが、運動の量は却々測るわけにも行かぬし又その見當を誤ることが少なくないやうだ。これに關する二、三の注意を書いて見やう……

第一——一日何時間の運動を課するといつても運動の種類によりて大なる相違がある。

$$\text{運動量} = \frac{1}{2} mV^2$$

(Vは速率)

(三) 運動の量と食餌

抑も運動の量なるものは物理学の公式に従ひ、これを行ふ速度の自乗に比例するものである。これに關しては曾て別著に於て詳述して置いた。簡單にいへば、速度を二倍に増せば、運動の量は四倍となる。速度を三倍にすれば運動量は九倍となるわけだ。一例を擧げて分り易く示せば、今或速度を以て三十六分間行ふたものは、その速度を三倍にすることに依つて僅六分間で済むといふことになる。しかし、速度を増すのがよいとか悪いとかいふことは別問題である。

第二——犬は日課的の運動の外に、又は日々定まつた仕事の外に何をして暮らしてゐるかといふことを顧慮に置かねばならぬ。廣い場所で飼つてある犬と狭い圍の内に閉ぢ込められてゐる犬との一日の運動量は實に同日の論ではないことは誰でも氣の付くことである。その外犬舎の位置の靜否等一として體物質の消費に關係しないものはない。物を考へたり氣を配つたりすることさへも、身體を働かすと同様多くのエネルギーを消耗するものであることを我々は胸算して食餌の量を考へなければならぬ。

水浴は勿論一般梳拭手入も亦儘に運動に代はるだけの新陳代謝をなさしむるものである。犬を洗つた後では特に牛乳又は卵等を給するがよいといふのも、水浴なるものが可なり多くの體物質を消費するものであるから、うつかりするとディスプレイなどに見舞はるゝからであらう。これ等日常の凡ての事を加味計上することによつて運動の量なるものを正しく知ることが出来る。これ等のことを除外して漠たる觀念の下に一日何時間の運動を課するのがよいとか、又それら對して幾何の食糧を與へるのが適當だといつた所でそれは多くの場合意味をなさないであらう。誰某の犬は一日一時間の運動を課して幾何の食物を給してゐるが立派なコンディションを持つてゐるから、自分もそれに倣ふといふが如きは幼稚な考であらねばならぬ。

訓練場に預け入れられた犬は相當な食物を給せられてゐるにも拘らず痩せ勝ちとなる。その主な原因を考察するに、馴れない境遇に於て馴れない未知の人に取扱はれるので家庭に於けるが如く晏如としてゐるわけに行かない。又新しき科目を習ふことに依つてむしろ身體よりも頭腦を使ふ方が劇しいからであるやうだ。

梅雨や霖雨にて充分なる戶外運動を課することが出来ない場合でも、犬體の手入を特に勵行することによつて食慾に何等の差異を生ぜしめないやうにすることが出来る、等々を具に考へるときは運動と食餌の量との實際問題はあまり簡單にかたづけられるわけには行かない。

尙、注意にまで言つて置く。右は体内物質の消費と食餌の量との關係に就いて述べたものである。しかし、眞の運動に依らずして体内物質の消費をしたからといつて、必ずしも日課的運動を節約してよいといふのではない。即ち身體鍛鍊の爲めにする運動なるものは別の立場に於て考へなければならぬ。簡単に説明すれば、

いくら頭を使つて体内物質を消費したからといつて、それは決して筋骨の鍛鍊には資せないといふのである。故に體力鍛鍊の爲めには体内物質の消費如何にかゝはらず、適當なる考案の下に適當なる運動を實施しなければならぬことはいふまでもない。

序に言つて置きたい。若い犬は多くの食物を攝ると共に多くの運動をなすものではあるが、一回に課する多くの運動には耐え得ないものである。故に、一回に長き運動を強ゆることは筋腱を弱くし、骨を曲げ、内臓の發達を阻害するばかりでなく、體力の劇衰に乗じてディステンパーにさへも隙を與ふることとなる。何人も幼犬に運動を強ゆるといふが如き愚かなる考へは毛頭ないであらうが、幼犬を散歩に連れ出すに方つては深く注意しないと、不知不識して過度の運動を彼に強ゆる結果となることは決して珍しくないであらう。仔犬を散歩に連れ出して帰宅後間もなくディステンパーに罹

つたといふことをよく聞くが、それは途中でディステンパーの病原菌に出會つたからといふよりも、むしろ過勞に乗ぜられたといふのが眞理であらう。「あれが過勞とは？」とその人は疑問を懐くであらうが、散歩の途上遭遇する凡ゆる外界の事物は仔犬の爲めには一々豫想外の刺戟を與ふるものであつて、エネルギーの消費を大ならしむることは想ひ半に過ぐるものであるのだ。筆者はディステンパーの原因の一をこの平凡なる「過勞」に算へてゐる。

お話は横道に這入つたやうだが、要は食餌と運動との調和といふのであつた。而もその運動の量なるものは唯正規の日課運動だけを以てその多寡を云々するわけに行かないといふのである。

併しながら、管理の實際に於ては理窟に傾くことなく、犬そのもの、實際のコンディションを見て彼是の調和を圖るといふことが最も大切な條件であることを忘れてはならぬ。

(四) その他の環境と食餌

この問題に關しては既に前二節に於て可なり多く織り込んで置いた。されば、こゝに残されたる部分

は、
氣候と犬舎設備との關係といふことになる。

(四) その他の環境と食餌

(5) 氣候と食物との關係

氣溫だけでいへば、攝氏十五度位が犬體の保健に最もよいといふのが定説であるが、兎に角、高濕多濕の候は新陳代謝の機能を妨げ食量の低下を來たす。これに反して低濕のときは體內物質を無駄に消費せしむるものであるから比較的多くの食物を給せねばならぬ。

いくら脂肪過多の食物がよくないといつても、沍寒の候には脂肪分を多給し、夏はこれに反する注意が必要である。試にエスキモー犬の飼料を顧ることにしやう。

彼等はグリーンランドやアラスカに於ては海豹と海象との肉を以て飼はれてゐる。これ等の肉の半分は少くも脂肪分であるのだ。この脂肪分の助けに依つて彼等は沍寒に堪え得るものである。彼等は犬舎を持たずして露天下の雪の上に穴をも掘らずに丸まつて寝るものであるのだ。

而も多大の脂肪分は犬の體內に於てどしどし分解消費せられてゐる。この事は彼等が如何なる仕事をなしてゐるのかも考ふれば直ちに了解せらるゝであらう。假に脂肪分がそのまゝ蓄積せられ過肥に陥つてゐるものとすれば、大なる勞役には堪え得ない筈だ。

エスキモー犬は冬季橈を曳くことを天職とするものである。良いチームであれば、一時間平均六

哩乃至八哩を走ることが出来る。その輓曳量は駿足を要するときには犬の總體重に等しく、遅くてもよいときは二倍以上ともなる。普通は總體重の一倍半を基準とする。而して普通の場合に於ては一氣に三十哩乃至四十哩を絶えずトロットを以て六、七時間にて突破するを常とするといふ。海軍少佐マクミランは十八時間を以て一氣に一百哩を突破した記録をさへも持つてゐる。

我々はエスキモー犬の作業能力に多大の敬意を拂ふと共に、その食物なるものは氣候と極めて大なる關係を有つものであることを了解しなければならぬ。

(ろ) 犬舎と食物の關係

氣候なるものは我々人の力ではどうすることも出来ないが、これを或程度迄調節することが出来るのは犬舎設備そのものである。

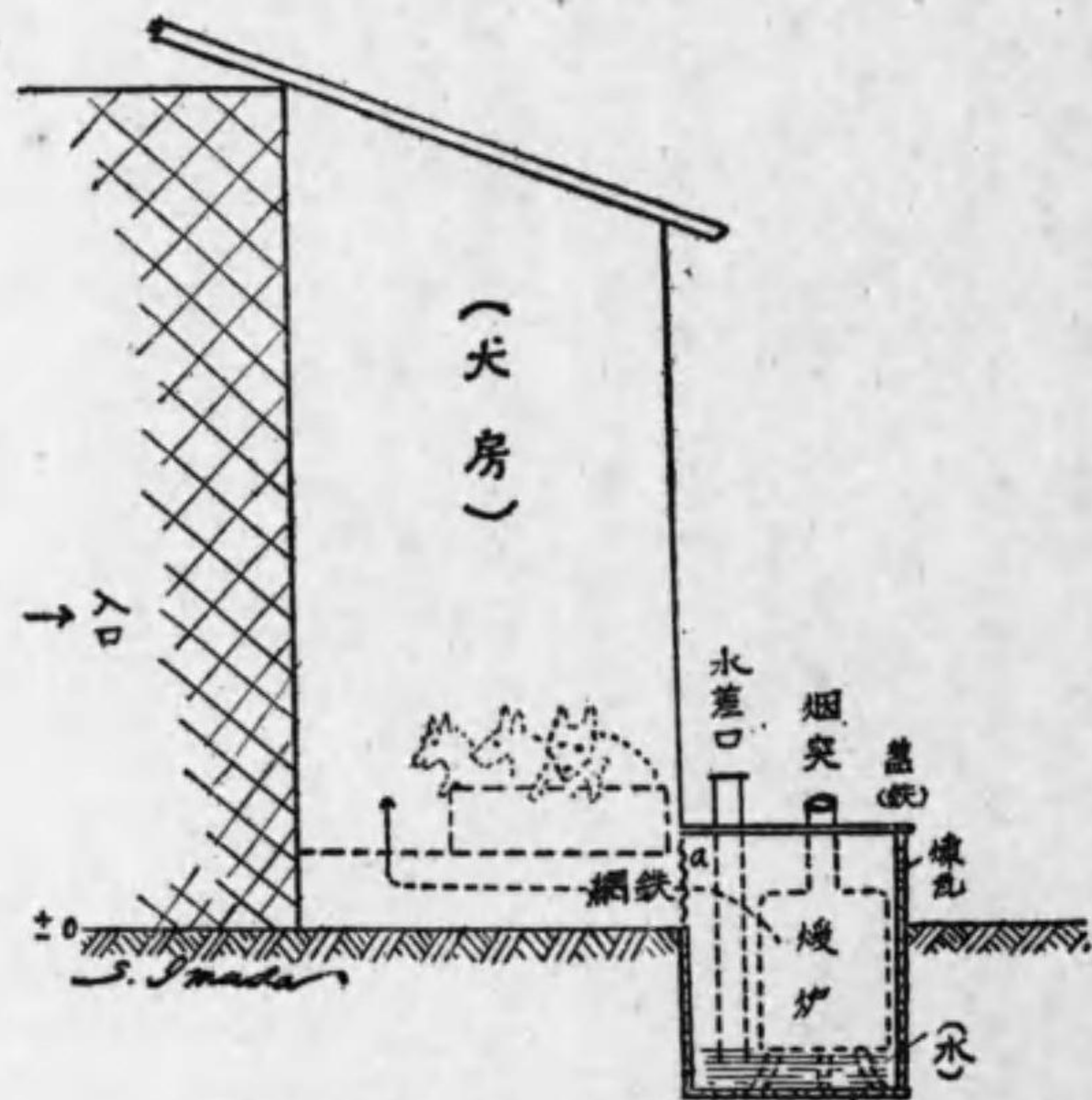
犬舎の位置は多濕ではいけない。樹木の覆ひかぶさつた所は避くべきであると唱へられてゐる。しかしながら、これは程度問題であらねばならぬ。犬舎の傍に落葉樹を適當にあしらつて置くことは我國の氣候に於ては多くの場合最も適當なるものと思ふ。それは夏暑い時だけ涼しき木蔭を作り冬から春、秋から冬にかけては枯枝や新芽の間から充分なる日光を犬舎に射込ませしめ得るやうに。

栄養品の消費を無駄にしない見地からいつても、少くも關東以北の地では犬房は二重装置を推奨したい。

抑も嚴重に寒風を遮るといふことと新鮮なる空氣の交換をよくするといふことは互に矛盾する要求となるものであるが、要は犬體をして直接寒風に吹き曝さしめないといふことを限度として、どこまでも新鮮な空氣を取り入れたいものである。これが爲めの犬舎設計は喰ひ違つてゐる二重の入口を持つものを推奨したい。空氣の交換は唯單に鬱積せる炭酸瓦斯を逐ひ出すばかりでなく、動物の保健に極めて大切なるイオン正負の調節を良好ならしむる爲めにも緊要なるものであることが近頃學者に依つて唱道せられてゐる。これ等はいふまでもなく攝取したる食物の同化作用を善導するにも役立つものである。

(は) 煖房装置

寒き地方に於ける初生仔の育成に當つては煖房装置の必要なることを「問答」中に書いて置いた。茲に當協會養成所に於て創意されたる煖房装置に就いて大體の要領を紹介して置かう。犬舎犬房の後方戸外の土を掘り下げ、煉瓦又はコンクリートにて組み上げた穴を造る。この穴の中に煉炭煖爐を



煖房装置の要領

据え附けるのである。(a)は煖爐より發生したる熱氣を犬房内に導く爲めの通路である。これには火災豫防上念の爲めに金網を張るのがよい。

今少しく詳しく説明すれば、煖爐の熱に依つて穴の底面に入れてある水は蒸發し、適度の水分を含む温空氣を犬房に送るといふことが本装置の大切な眼目である。

本装置に於て七寸煉炭を用ゐれば犬房(高六尺、幅六尺、奥行四尺)二個に對して適度の保温をなさしむることが出来る。即ち東京附近の嚴冬に於て概ね攝氏

十五、六度を絶えず保持せしむるに足る。尙これが爲めの煉炭の消費量は一晝夜を通じて二個にて事足る。

(に) 飲水設備

飲水は血液の構成循環の爲め必要なるばかりでなく、体内に出来る勞廢物を薄め、腎臓の働きを刺戟してこれを容易に體外に排泄せしむる爲にも必要である。又見方に依つては適良なる飲水の設備は氣候の影響を緩和し、犬の衛生生理を善導するものといへる。然るに動もすれば、この大切な飲水の設備が軽視せらるゝ傾きあるを遺憾とする。不完全なる飲水の供給は犬のコンディションを悪しくするものであつて、この状態を長く続けることに依つて犬をして瘡癢にさへも陥らしむることはあり得べきことであり、殊に發育中の幼犬は所期の如く發育を遂ぐる事が出来ない。

故に夏期は特に屢々水を取り換へ常に清涼なるものを與へ、犬をして好んでこれを飲ましめ體温を調節せしめねばならぬ。冬季近寒の候には凍りかけた水をその儘犬舎に放置するが如きは親切といふことが出来ない。これが爲めには飲水器は四季を通じて外界の感作を可成受けない所に常置したい。

飲水の爲めの最も適當なる施設としては少量づゝ新鮮なる水が絶えず流出するやうに水道を導く装置を大いに推奨する。某氏の考案に依るこの種装置を實視したるに、犬が絶えず少量づゝ清潔なる水を舐めつゝある光景は繪にも畫きたい程美しきものであつた。これは想像以上效果的のものであることを今一度附け加へて置く。

かくの如き設備が出来ない場合には次の如き要領に依るを良しとする。



例一の器與水

犬が水器を覆さないやうに、犬の行動によつて自然不潔にならないやうに、又炎熱近寒の感作を少くするやうに飲水器は犬房内の一隅を選び適度の高さに掛け置くこと。これが爲め飲水器は可なり大なる量を充て得るものであつて、而も廣きものよりも深きものをよしとする。

(五) 食物の分量

犬の食物の量は犬それによつて又環境の相違によつて大なる差異のあるものであることを我々は知つた。

故にこれに對して一の基準を示すことは愚かな企てではあるが、眞の參考の爲めにハッチンソンのドッグエンサイクロペディア(一九三四年)の所説をかひ摘んで次のやうな一表を作つて見た。參考のその又參考までに

犬の食量基準表

犬ノ種類(大小)	一日ノ食量(匁)
セント・バーナード、グレート・デン等大型犬	二五〇—五〇〇
コリール、シエバード等中型犬の大	一二〇—二五〇
エアデール、ブルドック等中型犬の中	一〇〇—一八〇
フォックステリア、スコッチ・テリア等中型犬の小	六〇
ポメラニアン、ベキニス等小型犬	三〇—四五
備考 以上ハ凡テ動物質食品ニ對シ植物質食品一ノ割合ヨリ成ル混合食ニ依ルモノトス	

尙、ハッチンソンの所見に従へば、犬の體重一ポンドに對して食物の重量半オンス(概略の換算

一二〇匁對四匁弱)といふのが大體の標準である。

(六) 食物の品質

犬の食物としては兎に角動物質の多給を大いに唱導した。尙ほその意義を強調する爲めに今一度これに就いて研討して見たい。

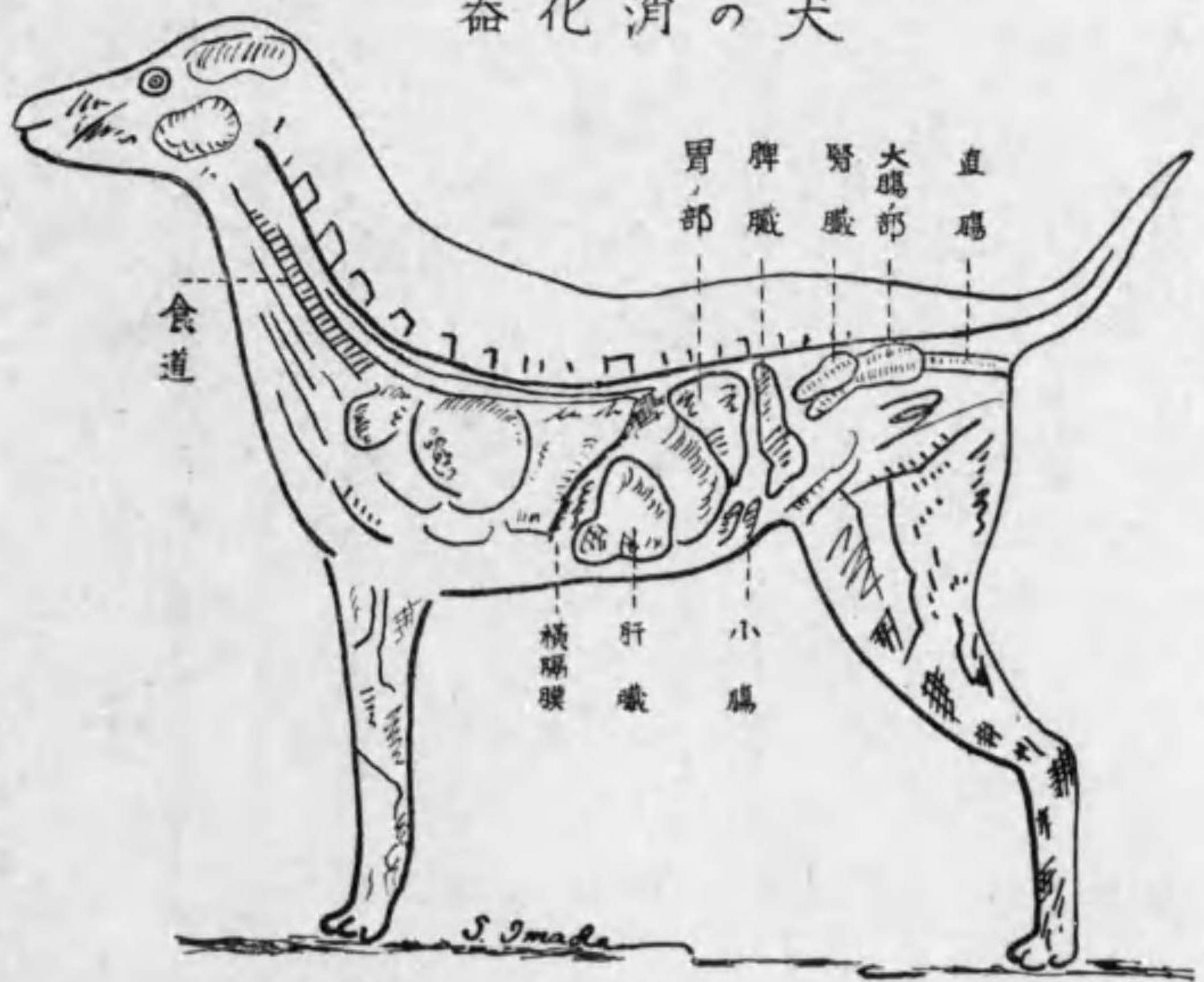
(五) 犬の齒と食品

犬の齒は今日でも肉食獸の有つそのまゝの形で残されてゐると言つた。これに就いては多くの説明を要しない。犬の口中を一寸のぞいて見れば直ぐ分る。所謂犬齒(左右各一對)のことはいはずともがな、奥齒の形が臼のやうになつてゐない。こゝにいふ奥齒とは犬齒に續く小白齒(左右各四對)とその奥にある臼齒(上顎左右各二個、下顎左右各三個)をいふのであるが、その形は馬や牛や人類のものとは全然異なり参差として尖つてゐる。言ひかへれば上下の噛み合せによつて臼の如く食物を摺りつぶすやうに出來てゐない。即ち肉を割き切り骨を噛み砕くだけにしか相應しくなく。

(ろ) 犬の胃腸と食品

(六) 食物の品質

犬の消化器



犬の胃はその腸に比しては比較的大である。これは肉食獣に於ける特徴の一であるのだ。而も消化器系全體の長さは馬や牛や人類のものに比すれば遙かに短く短いものである。これは容量の大なる植物質食品を攝るに不適當であつて栄養分の凝集緻密なる肉類を攝らなければならぬ設計である。

(は) 犬と綠草

野生の犬は鳥獸をあさつて生存してゐる。しかも、この餌をあさる爲めには日々數里——十數里の間を駆け廻るものである。もし、野生の犬が植物質

の物を食ふものとするれば、それは僅かに新鮮なる綠草(中には果物を食ふものもあるといふが)の少量に過ぎないのでなからうか。それは我々の畜犬が時々綠草を食ふのと同じやうに。

果してこの綠草なるものを何の爲めに食ふのであるか?

これに就いては多少異つた見方もあるであらうが、多くの場合犬が胃酸過多で苦しむとき、内寄生蟲の爲め氣持のわるいとき、食中り等で腹具合のよくないとき、好んでこれを食ふやうである。胃酸過多のときは數分にして草と共に黄色の液を吐出す。蟲がゐるときは草と共に吐き出すこともあれば糞と共に排泄することもある。腹具合の悪いときは五分たゞぬ間に綠草を混じた不消化便を出す。之れは恰も物理的作用をなすやうだ。少くもこれ等の場合に於ては綠草から栄養を攝るものではない。

以上の現象は犬の食物として野菜類を多く用ゆるの必要がないことを示すものである。

しかしながら、犬が草を食ふといふことはその原因の如何にかゝはらず天然の攝理であるから、市街地等に於て自由に綠草に接する機會のない場所にあつては犬舎内に草を植えた箱を備へ附けて置くことは賢き方法でなくてはならぬ。これが爲には、小さな箱に麥又は粟等の禾本科類の種を蒔

き相当成長したるものを入れてやればよい。尙逐次交代使用し得るやうに二、三個の準備を要せん。

(に) 肉食と持久力の關係

或人は云ふであらう。今日の犬は甚しく家畜化せられてゐるから雑食せしめねばならぬと。これは或程度迄の眞理であつて殆んど疑ふの餘地がない。しかしながら、考へて見るに、多く雑食せしむることによつて野生の犬の如き激しき運動に耐え得る力は漸次低下せらるゝものではなからうか。否、或種の犬に於ては慥かに低下せられてゐるものと思ふ。これが反證として、今日でも自分の畜犬に對して激しき仕事を課さなければならぬ人々は、多くの肉食を給するより外に良い方法は無いと繰り返しく實驗してゐるではないか。

スポーツマンは肉食を多く攝ると持久力が少なくなるとか近頃の人は唱へてゐるが、人と犬とはその根本に於て、天然の構成に於て、相異なるものであることに今一度注意を喚起して置きたい。

(ほ) ヴィタミンとホルモン

犬の食物としては植物質食品はその量に於て動物質食品を超過してはならぬと吾人は力説した。

されど、それ等の中に含まれてゐる主要栄養素(蛋白、脂肪、澱粉)は別として、植物質の中にもヴィタミンやホルモンの如き動物の栄養生理上必須缺くべからざる補助栄養素を多分に含んでゐるものがあることを知らねばならぬ。勿論、肉類の中にはこれ等の要素は多分に含んでゐるものであるが、これを植物質食品の中から攝することも極めて有利なる一考案であらねばならぬ。今項を追ふて所見を加へん。

ビタミン一覽表 (ドクトル・ターナーの所見に依る)

ビタミンノ種類	効能	多く含む飼料
A	成長促進、新ナル組織ヲ作ル	動物ノ脂肪・肝油・卵・牛乳・バター
B	神経系ノ調節、乳汁ヲ多クスル	穀物ノ胚芽・卵・酵母・堅果類・新鮮ナ野菜
C	血ヲ清メル、尙癩病豫防	新鮮ナ果實ト野菜・柑橘類ノ果汁
D	成長、骨ノ建設	肝油・肝臓
E	多産	麥ノ胚芽・燕麥・新鮮ナちしや・卵

ビタミン は生の肉類や新鮮なる穀物や野菜の中に含まれてゐるが、これは調理に依る加熱の度に従ひ破壊消失せらるゝものである。この見地からすれば、良い肉はなまで與へたい。但し臓物には色々の寄生蟲が巣くつてゐるものと見るのが賢い。又煮なくとも消化し得る野菜類は生かそれとも僅かに加熱することに止めたい。

前頁の一覽表はビタミンに關する概要のものであるが、犬舎庖厨に掲げて置けば或は便利であらう。

植物ホルモン 植物も動物と同じやうに一種のホルモンを持つものであり、このホルモンの作用に依つて植物は驚くべき力を以て發生成長するものであることが近頃生物學者に依つて研究發表せらるゝに至つた。——植物のかよわき嫩芽が顆殻を破り、堅き土を割つて地上にぬくと生ひ出すのもホルモンの作用——新しき枝が、軟かき蔓が萬難を排して延び上るのもその作用といふのである。この驚くべき力のある植物ホルモンなるものが、あるかないか知らざりし昔より我々人類は若き芽を有つ草を摘み、新に延び上らんとする野菜を藥の如く攝つて來た。蓋し、植物のホルモンなるものは植物體中のいづこに最も多く含んでゐるものであるか？ それは植物が伸び行く尖端——芽

に集中してゐるものであるのだ。

ビタミンやホルモンなどのことを考へ合すことによつても、どんな植物が、どんな野菜が犬の食物の添加としてよいかどわかるであらう。にんじんの如き特種の成分を有つものは別として多くの場合ぢやがいもの如き根菜類よりも青々とした葉を有つ野菜が欲しい。

蕪はその若き葉を刈りれば數日にして再び若葉が延び上るものである。ちしや、ふだんさうの如きはその葉をかきとることによつて、間もなく新たな若葉が次々と發生するものである。市街地等の狭き庭に於ても極めて小なる地積に於て手数を煩はさずして栽培することが出来るといふことを蛇足ながら附け加へて置く。

尙、道端の若草の中にも犬の食品として適當なものが少くない。

(へ) 食物の品質と體の組織

犬體の組織は食物の品質によつて異ふものであることを述べて置いた。これが理解を興ふる爲めに次に一例を示して見やう……

養殖鰻といへば食通の人は鼻つまみするものであつた。それは唯いやな臭がするばかりではなく

て、肉質がよくないからである。鰻屋は天然物と同様な焼方を施すことが出来ないで困つてゐる。これ等の養殖鰻といふのは所謂さなぎで飼ひ立てたものをいふのだ。

然るに近頃賢き養殖家達はこれが給餌の改良に氣付き、さなぎを廢して適當なる魚類を用ゆることとした。その結果は果してどうであらう？天然鰻をも凌ぐ美味な養殖鰻が我々の食膳に我々の味覺をそゝることとなつた。

私は鰻屋でもなく、食通でもないから右に關しては確かな保證は持ち得ないが、少くも犬にあつては、弱き食物で飼へば弱き筋骨を有つ犬となり、凝つた食物で飼へば緊つた組織を有つ犬となることだけは保證することが出来る。

(と) 食物の品質と肥瘦

食物の品質と犬の肥瘦の關係に就いては既に「問答」に於て詳述して置いたが、こゝに新説とでもいふべきものに就いて一項を附け加へて置きたい。

含水炭素の多給は皮膚に著しく水分を溜溜する。反對に、含水炭素の減給は排尿を良くし悪しき水分を放出するものである。含水炭素の多給によつて水分を皮膚に溜溜すれば全身に水腫を起さし

め、これに依つて外觀上肥えたる状態を呈せしむるのみならず、體重をも増すものがあるのだ。但しこれは眞に肥えたるものでないことはいふまでもない。水肥の犬といふのがこれである。水分溜溜は如何なる内臓の如何なる機能に依るものであるかは尙研究の餘地があるのであるが、含水炭素なるものは水代謝に至大の關係を有つてゐることだけは近頃精査確證せらるゝに至つた。

兎に角我々は澱粉質の食品を多給することによつてぶくぶくの犬が出来ることを確かに認めてゐる。これは右の關係も多少手傳つてゐるのかも知れぬ。

(ち) 飼料と骨軟症

抑も家畜に起る骨軟症の原因は色々あつて未だ判然と分つてゐない。多分飼料に含まれてゐるカルシウム分の不足が最も大なる原因であると信ぜられてゐた。

これに關して農林省獸疫調査所に於ては長らくの間研究が續けられ、今や信賴すべき結果が發表せらるゝことになつた。それに據れば、

今假に他の條件が合理的であつて、飼料の關係だけで骨軟症が起るものとなれば、それは食餌中に含まれてゐる磷とカルシウムとの配合の鈎合がとれてゐないからである。然らばどんな鈎合にな

つてればよいか——それは磷とカルシウムとの比率即ち磷の重量をカルシウムの重量で割つた値が〇・五乃至二・〇であれば先づ適當な鈎合といつてよいといふのである。

今この比率説を犬の食餌に應用するものとすれば、先づ混合食のそれ／＼食品中に含まれてゐる磷とカルシウムの量を知らねばならぬ。説明を簡單にする爲に主要食品たる玄米と牛肉に就いてこれを見れば、

品目		磷 酸 及 石 灰 含 有 量 %		國 立 榮 養 研 究 所 ノ 試 驗 ニ 基 キ 計 算	
區 分		磷 酸 PO_4	石 灰 CaO	摘	要
玄 米	〇・七八〇〇七	〇・〇五二二五	各等級ノ玄米十二回ノ試驗成績ヲ平均シタルモノ		
牛 肉	〇・七四七二五	〇・〇〇五七五	一等、二等、三等、四等ノ牛肉ニ就イテノ平均		

である。

今この混合食を用ゐるものとすれば別にカルシウムを補給するの要があるかないか、ありとすれば何程であるかを調べて見るに、概ね左の如き標準を見出すことが出来る。

カルシウム補給基準表		磷 酸 卡 尔 西 姆 一 日 量	
混 合 食		一	二
玄 米	三〇匁	茶匙(チー・スプーン) 一 杯 半 杯	
牛 肉	六〇匁	主 杯	
合 合	九〇匁	同	四 杯 半

米と牛肉との混合の比率を多少變更したる場合に於ても、混合食の全量が概ね同一であれば磷酸カルシウムの量は右に掲げてある量をそのまま用ゐてよいのである。言ひ換へれば、その場合に於ても磷に對するカルシウムの比率は〇・五乃至二・〇の基準範圍を脱することはない。

あまり科學的に陥つたやうではあるが、これは我々が從來やり來たもので別にむづかしいこととはないのである。我々は根本方針として化學的製品を犬の食餌に添加することを決して好むものでない。これに就いては別項で詳しく述べて置いた。しかし、カルシウムの應用だけはこんな理

窟は抜きにして実験上有利なるものであることが分つてゐる。この新説は正にそれを説明するものといつてよい。

しかしながら、獸骨を適當に犬に與へることによつて多少燐とカルシウムとの比率は適當なる範圍に保たせ得るであらう。

(七) 齒の衛生

犬の齒は我々人類の齒や牛馬のそれとは異なり、唯食物攝取の目的の爲めのみ役に立つものではない。多くの犬種を通じてその齒は争鬭の爲めの唯一の武器であらねばならぬ。この見地から言つても犬の齒を強健に保持することは極めて肝要なものであることが分る。

さて、強健なる齒は如何にして出来るものであるか？ これを食物關係より見るときは親犬の身體を通じて、又仔犬の育成に方つて適當なるカルシウム分の補給を要する。その他平素の食物に於て適度に堅き物を噛ませねばならぬ。然らざれば、齒齦を弱め齒槽への齒の定著を弱くすることとなる。これに反して、甚しく堅きものを噛み砕かしむることは勿論いけない。これに依つてこれを觀れば、犬に獸骨を與ふることは唯單に營養攝取のためのみならず、齒牙を直接強健ならしむる上

にも極めて大切なるものであることが分る。

元來攻撃力の乏しいといふことは、犬そのもの、氣性に左右せらるゝことが大であるが一方、齒の健否、齒の強弱に關係する所が決して少くないことをも覺らねばならぬ。私の實驗に依れば攻撃力の弱い原因の半はこの齒にあるやうだ。弱い齒を有つ犬を如何に訓練すればとて多分勇氣凛々たる動作を發揮せしむるわけには行かないであらう。齒のわるい犬に攻撃動作を望むのは全然無理だ。齒牙を検するに茶色に腐蝕したるものを見るのが少くない。これは熱き食物を給したる爲めか、それともディステンパーから被つたものであらう。熱き食物を禁すべきことはいふまでもないが、ディステンパーに方つてはこのことを終始閑却してはならぬ。犬は助かつたが齒は腐つてゐるといふのでは駄目だ。殊に實用犬としては殆ど無價値のものだ。

含嗽は食慾を振起せしめ病勢を柔ぐる爲めに役立つのみならず、齒の掃除と相待つて齒を救ふものであるのだ。

我々のシェパードを見るに、唯年齢の關係だけでなく褐色乃至は茶色の齒を有つてゐるものが決して少くないやうだ。これは本種に於てはディステンパーの災疫が比較的高いからでもあらうが、

右の注意の足らざしことの一の痕跡とでもいふべきではなからうか。

平素の食物としては適當なる堅さを持つ骨を給らなければならぬ。もしこれが出来ない場合には堅きビスケットでもよい。齒の強健の爲めに與へたい。

尙、これ等の勵行を補ふ爲には齒ブラシの使用を推奨したい。齒磨粉は犬の口に入れて無害のものでなくてはならぬ。この注意の下に齒磨粉材料を選ばれば色々のものがあるであらうが、平易なる材料としては炭の粉や食鹽で事足りる。

年齢の關係でなくて齒に黃味を帯びてゐるものの中には齒の手入不良に基くものが可なり多いやうだ。注意と勵行とを促したい。

(八) 大醫バヴロフの實驗を横から見

露國大醫バヴロフは犬を用ひて最近の消化生理學を創造した世界的の大發見者である。それは勿論犬を飼ふには如何にすべきかの研究ではないが、その試驗を横から見れば、犬の給餌にも直ちに應用することが出来るであらう。

犬の食道を切つて次頁の圖のやうに(b)で外に開かせ、胃には管(a)を嵌めて外に通せしめて置



領要驗試のフロヴバ

く。この犬に肉を食はしむれば、肉は(b)から體外に外に出て胃に達しないが、胃液は盛に分泌されて(a)から外に出る。而してこの場合色々の條件を變ることによつて、胃液の分泌状態に變化を起すことが直ちに精密に分る。

又この方法に準じて犬の頬に孔を開き、これから流れ出る唾液の多寡を計り、右と同じやうな消化生理の現象を知ることが出来る。

これがバヴロフの試驗法の大體の要領であるが、この試驗で分つたものゝ中から二ツの結果を摘んで見やう。

(一) 或一定の食物で飼つた犬はその食物を與へらるゝとき消化液の分泌が最も盛である。他の食物ではそれがよしや美味と思はるゝものでも、消化液の分泌が止まるかそれとも少なくなる。

(八) 大醫バヴロフの實驗を横から見

(二) 或食物を與へてゐるとき、犬を怒らすとか、犬の嫌ふことを仕向けると消化液の分泌は急に止まるかそれとも甚しく減少する。

右の如き結果は勿論犬の心理上から來るものでなくて、全然生理上から來るものであることをバヴロフは強く説得してゐる。

今これを犬の給餌に應用するものとすれば、次の二項に歸納することが出来るであらう。

(一) 犬は常食時食ふ一定の食餌に對して最もよい消化力を現はす。

(二) 犬は最も靜かなる状態に於て食事するとき最もよい消化力を現はす。

この二ツの事項に就いては既に縷々として説述して置いた。而もそれは他の方面からの觀察に依るものであつた。然るにバヴロフの試験も亦これを明瞭に證明することとなつた。

さて、最もよい消化力を現はすといふことは、いふまでもなくその品質が何であらうと、最もよい栄養上の同化吸収を意味するものであることも既に述べて置いた。

尙これを敷衍すれば、犬の食事は多くの人が考へるやうに、あまり度々變化を與へるのは却つてよくない。もし變へる必要があるならばそれは漸を以て變へて欲しい。度々變化を與へぬ爲めには

定食はその内容に於て各種の栄養分を包含する如き混合食に依らなければならぬことは言ふを須たぬ。

又或食餌が一般の犬の爲めに最もよいものとしても、犬によつてはその嗜好を異にするものがあるから、それは參酌してやりたいものである。

(九) 成長の旺盛期

幼犬の育成に於ては幼い時どし／＼成長せしめねばならぬことは既に力説した。

されば、この幼いときの中では何時が最も成長率の盛なときであるかを知ることが大切である。

これは犬の種類によつても可なり大なる差のあるものではあるが、生後二ケ年頃より同五ケ月頃迄、特に四ケ月頃が最も旺盛なる時であることが出来る。この旺盛期を知らずして出産時より完成期に亘り漫然として仔犬の成長を見守るものありとすれば、その人は多分所望の犬を作り上げることは出来ないであらう。即ちこの成長旺盛期に於て延ばすものは充分延ばさねばならぬ。そしてその後の時期に於ては漸次所望に従ひ調節することも出来る。

然り而して、犬の種類に依つては標準サイズを超え易きもの、これに反して標準サイズに達し

難きもの等色々あるであらう。このことはそれ々の犬種に就いて豫め知つて置かねばならぬ大切な条件であるであらう。

ほんの参考ではあるが、著者が注意して試験したるエアデール・テリア種の成長状態の一例を掲げて見やう。

エアデール種(牡)發育成績表		(一例) 昭和九年調	
生後(月)	體	體	高
	(貫)		
一月	〇・六〇〇		
二月	一・四四〇	〇・八四〇	
三月	二・二八〇	〇・八四〇	
四月	三・三〇〇	一・〇二〇	四五・〇
五月	四・一一四	〇・八一四	五三・〇
六月	四・八五〇	〇・七三六	五七・〇

月	體	體	高
七月	五・二八〇	〇・四三〇	三・〇
八月	五・四〇〇	〇・一二〇	一・〇
九月	五・五〇〇	〇・一〇〇	〇・五
十二月	六・〇〇〇 (以上)	六二・〇	〇・五

(十) 人工假母器

賢き蕃殖家は牝犬の分娩が近づけばその様子に依つて豫め假母を探して置くであらう。ライオンの子でさへ犬の假母に依つて育てらるゝものであるから、假母犬はどんな種類の犬でもよいが、なるべく實母と概ね同等の犬が好ましい。

生後四日以上たつたものを新に假母に付けることは漸次危険を増すものである。假母を要するとき適當なるものを適時に見付けることが出来ない場合には止むを得ず人工假母に依らなければならぬ。人工假母とは假母の代りに人の手に依つて哺乳等の役目をなすことをいふ。普通赤ん坊に用ゆる牛乳哺乳器を用ゐても済む。

(十) 人工假母器

(十一) 病犬の給餌要領

犬が欠食すること二回以上となれば、先づ病犬としての取扱ひをしなければならぬ。それまでは犬が平食を食はなければ、他の嗜好物又は滋養物でさへも一切與へぬ方がよいことは既に述べて置いた。その後は如何にすべきやを今少しく詳しく書いて見やう。

その後は手を變へ品をかへ、犬が尙元氣を保持してゐる間に少量づゝ何とかして食はしむることが第一の要件であるのだ。こゝにいふ少量といふのは極めて意義が深い。この際一度に多く食はしむるときは或は吐き或は胃腸を害ふこととなるであらう。眞に少量づつ而もその回数は多くといふのが最良の方法である。

多くの初心者陥り易き失策は犬が最初唯一食欠食するや、大いに心配して主に牛乳を或は卵を或は生肉を以て犬に勵めることである。かくすることに依つて自然が犬に與へたる絶食療法は破られてしまふ。即ち一食の欠食で治るべきものも治らず、終に胃腸の不調を來たすこととならう。

こんな人に限つてほんとに犬が食はなくなるや唯醫藥に依頼して食物の方はお留守となり勝ちのものである。病犬に對する食餌法とはこれからの努力をいふのであることを知らねばならぬ。ほん

とに犬が食はなくなつてから空しく一、二日を経過するならば、犬は俄かに衰へ病勢は益々募る。かくして不起の危険に陥るものであるのだ。この際採るべき方法としては

- (一) 色々と品を換へ、料理法を變へて見る
- (二) それでも駄目のときは流動食を水薬を飲ませるつもりでやる

(五) 最後の食品

この際の流動食としては、牛乳あり、肉汁あり、卵ありであるが、肉汁はいふまでもなく良い。しかし、生卵は飲ませ易く消化滋養にも富むものである。牛乳はむしろ推奨すべきでない。

肉の煎汁は病犬の最終の食物といつてよい。その作り方は

脂の少い牛肉二百匁を細かく切りきざんで、三合の水を以てとろ火で煮る。煮る事約一時間半、煮立つてから十分間置き、火より降して直に液汁を取つてさます。これを犬に與へるのである。注意としては、これに用ゆる肉はひき肉ではないけないこと。鹽その他の調味品を加へないことである。

最後の食餌——肉の煎汁は薬よりも大切であることを今一度繰り返して置く。

(へろ) 流動食の飲ませ方

上手な人は犬をして巧に食を攝らしむることが出来る。その方法には色々あるであらうが左に一、二を掲げて見やう。

(一) 犬の口を少々上向きとなし、齒は閉ぢたるまゝにて頬の袋を開きこれに少量を注ぎ込み、しばらく口を支へて咽喉部を撫で、やる——流動食は奥齒の間から口中に流れ込み犬は自然にこれを嚥み下すものである。

(二) ゴム管を口中に差し込み注ぎ込む。

(三) 飼主自身の口から移して與る——犬の口を少々上向けとして少しく開き、飼主の口から少量づゝ流し込んでやる。口移しといつても、口と口とを附けなくてもよい。

犬は飼主の口から移さるゝ物は安心してこれを飲み、又飲まねばならぬものと思ひ込んでゐる。これは犬の犬たる性情の然らしむる所であるのだ。

凡そ注意しなければならぬことは……犬の口を大きく開いて流動食や薬を注ぎ込んでならぬといふことである。それは多くの場合過つて氣管の方へ流し込むことになるであらう。危険千萬であ

る。

右の各項はいづれも極めて些細な事柄を書き立てた嫌ひはあるが、この些細な事柄が犬の生命を左右するものである。決して忽せにしてはならぬ。今一度注意を喚起しておく、食を斷つた犬は如何なる妙薬を以てするも之れは一步／＼死への道を通りつゝあるのだ。晩かれ早かれ死ぬより外に行くべき所はない。最もよい方法で何とかして滋養を注ぎ込まねばならぬ。少量づゝそして時々といふのが我等のモットーである。

これを以て本編を終る。分り切つたことをくどくどしく書いた。これは分り切つたことを實施せられない人の爲めにといふ一片の老婆心からであつた。

(犬を飼ふ秘訣終)

昭和十一年一月七日印刷
昭和十一年一月二十日發行

犬を飼ふ秘訣

定價壹圓貳拾錢

不許
複製

著者兼發行者 今田莊一

印刷者 栗原七郎

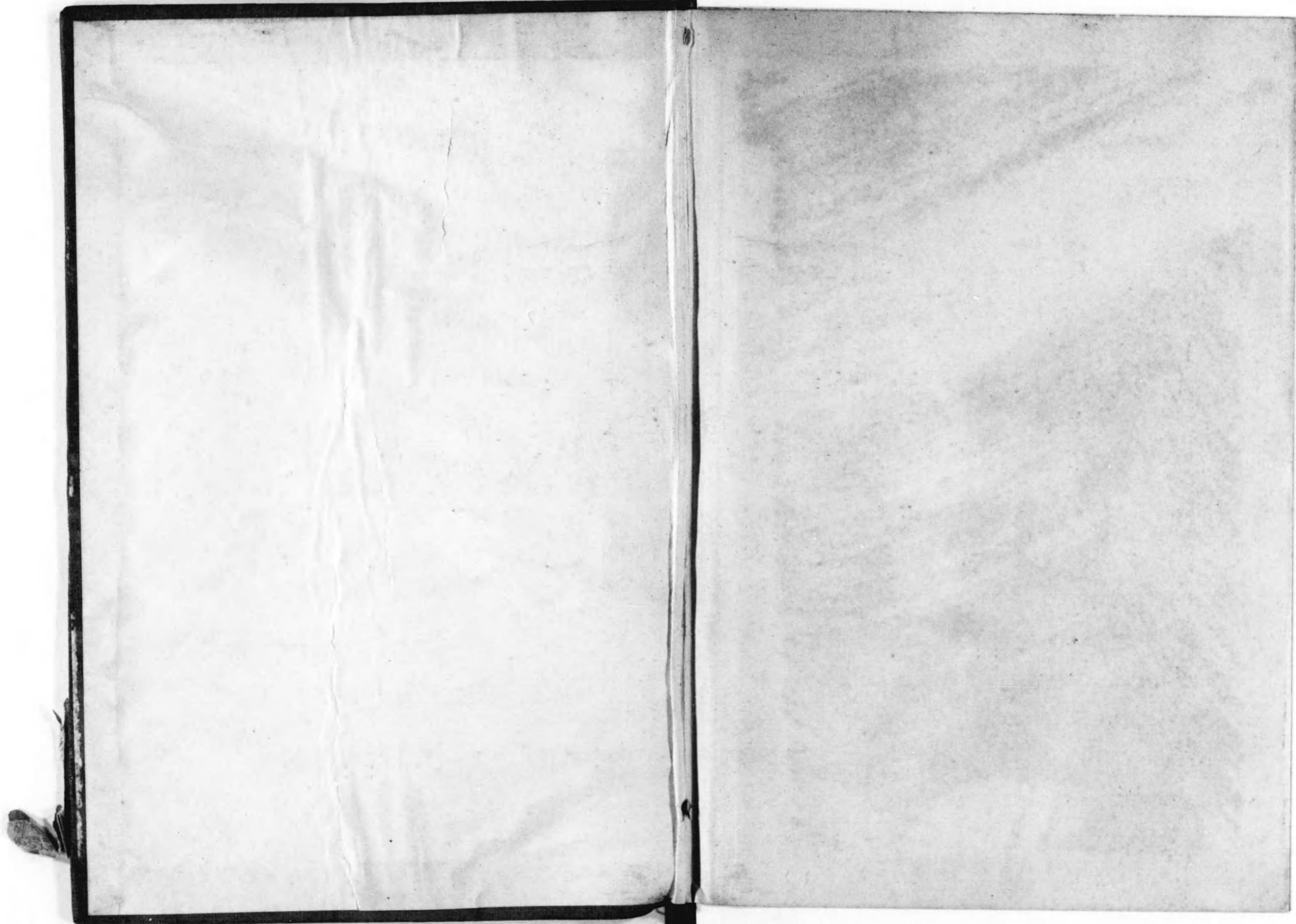
印刷所 埼玉縣浦和市三、六八七番地 栗原印刷所

埼玉縣浦和市岸町三、五六五番地

發行所

哮天舍

振替東京七八〇八四番



終

